七部渡安心錄

七曲齋

七部婆心録七卷

○續猿蓑

曲齋 注

古来新集と仮化とゝ或とを和く

我風体といふものを志すもの多しとの論あり

ハセヲ後 打日記毎日集とゝ毎日あり拾遺あり

水号は後人にして毎日集あり拾遺あり

我人新集あり百列うり拾とも

あり世に知るものゝ白みき加よ

者をすて有るい者り古来凡兆を世よ

存て今一変あるべしとつるは但是さる

は我人よりて陸号ぬ拾遺 東武久く

居をトる地名れい孤屋地名の歌集は求

るよう文るは但七席も来れは譲れれそ

間も世下は後さりて張り今夜古芳

ま殆ホう生玄の伊賀は拾あき恨あと逢

しあれは後猿のとセしと拾をつれと彼地そ

集出すべきものあまたしく考へむい
ろんなけよりむしろ所柏集化
らしと思ひ及志をまして多まりぬ其
集より修しと思ひあり八名の者の字 勇さう 之今後
出すべきものの考へ〳〵よの彼氏三尼老 浙房氏 五老
出さしとす猶去芳とも出つきとおもも
二百余もあり此者日抜の小冊とあるし
ろき集に其風体を撰者のみる合体
するをもとす野 鄙

◆氏辰の曲翠のお語く度人多去候新
雅炭続きもて七ア集と号し氏者を
おとりし因 初懐紙を加く続雅を除き
七アとして「我門の風体を学ぶ人の郭歩
のろ句多日去日あのひさこ雅らの炭
俳あを熟語やよ氏正風信の句を引ろ
歌号の秋詩て続雅を評者むとせし

頒之七アのるい義多て其釈注ふ五義
を考てお好きてるいあす義ものの
法家法教の五歌五章玄義の名體宗用
教ふ家ぬすし社ぬい今十教更ある
七種五歌ふ家て七部の名義を分雅
すしされとて何凡い其諸宗法教も已
又てるいあく五那ちの和ふ孝学て
さうちとるるる考へ

八月七日 七日続雅い先陪の撰ふお連
あきや去来日いるふ和七日ふ富のる中ぬ
京入や名和の田植社ふる中 とふ我句い
先陪辻化の和ふ多桑集ち陪さの句し
さるふ続雅ふ加入ちいるふ去来日続雅
先陪辻化の多七月いるふ陪ち時見の
松尾芭蕉ふ及又い雅撰五芳俱ち氏国そ
一集あきい弥ふと口設中されをいるもと

法のひとと文をに戸にて炭俵俵表より
云目は成能一法ふのかりも振ってる
あは殊一白二万は寸者とは表とさ
る者ゐ一者高格は殆ぬひ三者あり
◆氏一医い和七去来の向えの寸度人俳文を
狭くるおく文法い文一はとを京入の白くコハ
え祖二年の反和七京は登て高摂舎を
訪一時七はの力仏之[反号]秋者十八丁右ヨリ

一 え祖の跡は登て高摂舎をれて
京入や名れの田植孔雀の中　和七
くれーと色む　和苔は十　去来
力仏畧和七十二去来文州ユこ道五
邑和三酒者三車要二百之
氏一者いけ余者て今拾は付れ
さむおれと先法我自分を夫すく
評ぬひもおくくけは記ス」

と別ちて え祖十二年去来也高てて
反名集をあむ中は氏一者を加れ義は
何者ゐ所く十年おの風潤者のを
は別ちて入集する反は心切ゐ去来
和七何て無云ちて前の遠者を云度す
名やは世は反名あるゐも者め無者の
宰[illegible]き人の名社記を伝ーるゆく
[illegible]さるを高格分足て集も出く物ら其者
は稼ぎ物分の者あるは今一三者加て出さ
ずやと我も文通ぶて序も高ぬひく
◆ハ上は拳くる[ハセ年法]十二丁
文十二丁の文を捨て氏文を加を反年森
の時両年を技令ーるは文者吳ゐ加は
双方拳ーおく氏物分の者ヲ加るゆ俳文
社遣くコハ え祖七年七月九八の社化世之
そを五度の朱拙を交て同十二年[illegible]の者

集作りて家隆卿の詞を集出すべきを
あり」とあるをもて世々の書い続猿の引歌か
らぬる事をさるよし俗文に載るを世し
いなの集あれい猿雑歌にも入れ来る方
あれい席あるべしと宗人はをを付さやむと
指思ふ所なれとなほの旨き者で片後にし
ばらく老所い猿ゐるの歌に戻る事の拍子
と高佐ゑのかゐは先陪猿ゐて方ゑ高
前之方に佐茂ゑく方に山佐信ゑ猿ゐて人今
樟ふ家ゐる い佐園ゑ和ゐて支考と猿恋
とゑ陪ゑ高佐ゑい宗博長て支考猿恋
ま猿ふ出命ゐされとも先陪ゐく書舞し
ゐくゐゑ〜いゐるんゐゐ考寸

▲宴も俗文の使之猿ゐの尼老所桐候て人
の歌乃陪もあり高佐ゑより文老所ふ猿
きゐふ高佐ゑて猿ゐの歌に戻る佐作
あむや佐ゑい宗ふ陪しかふ佐はあり

又猿猿ゐも陪を高ゐる歌出博は若宗春
佐ゑより支考に猿接ゐるを考ゐやゐ

又さるゐふ陪ゐるの白一部猿ふゐて社
猿猿ゐゐ櫻歌も面白ゐめ文上屋さ
佐春引佐ゐも歌ゐ原の形ふ猿ゐ水科
と猿ゐて方三ゐ考方尼先陪ゐしを
宗平一件カゐと陪ゐふ先陪の佐ゐ猿
考之尼季の句ゐそもいゐて集ゐて志ゐ
りしを雑佐ゐ猿ゐふ正ゐすゐ先
ゐて八月初ふ歌ゐひを高ふ宗ふ化陪ゐ
▲宴も俗文の使之九月ふいゐを佐て家
良ゐ候も〜出ゐ〜高ふ出て考ゐと雑
佐ゐ月歌ふ陪を考ゐやゐ（佐ゐ人ハ十二月アリ）
赤句ゐゐ俗歌もひを雑の考ゐ〜
ゐゐふ近化出ゐの句ゐれて佐方の句
を加ゐるも佐新年ふ先陪の志ゐ
〜ゐゐるを宗宗と出ゐる人の後ゐ

集加するおもむき集の挿句を考へられた
んは始めも第一句とも一流の集は殆
あられい何そ古句つ一きるもあり仏
まんあり集ってるおく

◆寛も仏文の使ひ方は奉るおをよつる
ちく院符い治国撰者支考内後又去
東文仲い梓をりおれい俳の吉東みく
笑陸の志宮りくみひるをおいみと
ゆる人の陸は集加るおみむ十方
ぬの拾ふいるあすは陸は腎の
陸文笑りみる吉東のより出め仏使
拾芭蕉後い明和乙の手肥後の文焼
も陸外尾氏ふて云ふのおとと文陸て
享和壬戌の夏上梓をとて芭蕉後と
号る西版ふつ熟考るふ天保十二乃
去吉東も陸ふて出一撰藤位の中も

表合三句の浮は許玄支考をみりくる
文あり又一版い後は仏文を狭るは殆
ふき由俳印録は使を引て寛さり今
試版と考合するふれ知七晋町おとの
門下は支考を始むれ去みてるを去東は
俳て言也云るを茅ってて写おって
熟俳し後梓も出すいさるを多
三冊子陸口おれるる白い集は出す附外は芭
て殆くくせるふ陸の十云沢乃
白印本ハ白トるクリ猿蓑ふそのむと一句は芭るる

月の部

北尼庵 すたれおい口をる周の初ふ 芭蕉
いさまひい周の乃ふそいのむ 猿蓑
◆コハ句列を左巡ふて句次のそれの
部はいる白まあす是をて考るまきの部
ちいえすりおるも縁初ちみくるを明ふ

廿九右 新セ一人い出り そいのも 李屑(三)
木の下は程出むふ枝をふ 蒙三
さきさるる時まし 瞬の橋 めるる
いやの牛馬ほ乳をとそ芭蕉(一)
そそいきさをてもてみすい時ふ 廿九
下モ刈て彦つき新や小百姓 乃彭
廿九左 山孝のとこやゝまく 新の橋 斗促
あらきは日ホひを束る小菜畑 支考(四)
一をあの之ときや芋のすんと刈 仝(五)
刈之きは姿は者一之そ芋 イ弦(二)

実いわ氏出加を之て後搾りの時い次をちむ
と名おおりしを芋移の信は勝一有はかく
次ある寸尾人り○を付一をくせ可みむ
熟氏葉の部ちを入るは八九る 花の雪
廿七 廿八 廿九 卅 卅一 卅二 再 花 アヲ
庵と並て羽の去を考改と一数号の
杉者をあの終は並さて身の扶のきは

月の旅を除て軸とせ一い杉者の老をある
あは茅稿みのと氏季の配を新作一る文
とりしさるんも考一でれ者の老をき老
改はすて一に一夜のろ宮ろ芋氏雪の
文書者平とつ之移る人のるれい皆
一あ寸僅一書とつ之かく一のと一沒や挑
葉の野書はおるを や変化自生て我ふの
字ゝ文みき人の注するるはあ寸

日本同著三 許云曰ゆ云いあるれて中氏い苦筵乃
さ者を横は食付てあと作れり氏搾るを
昭の之あは炭懐お注あは氏柿を彼て寸さ
みを振てひさと吸ゝと出もり文後時上臣
一仔葉は然て後稽とを挽の之きくさわ
の耳ゝを抜て遠弱の他件を殊せりときけと
も板出さきい考寸

◆コハえ祢土三月の巻記號稽出稽も同書氏

さてゐ時代凡周の強ふ為れと注する説猿
猿の説如く後人何そ言厚を手つらや
就人不猫怪に出作て猿猴を射る者
剛毫過子 猿猴ふくるる何出の二字い天下の凡
法度そて不猫怪一部の実文ふく拵猿猴い
江戸の宝生佔囲を拵去て丈人云候
の何候人之 佔は宝生お宮の戸通名なた夫 拙い出さくさる
ス表の大ふく弁集い文祖七の秋いゞの東
梦尾そていセよう生涯の技術 求るを待
て七八両月の間に宝拵ふく丈子細い茅
猴ふく実を紀き家候の考を補て犯
茅一代の法む強ふて凡丈の月ふ中く
及ひ出さるを仏出の都ふ入て「折紙の写孔
あきを白い狂ふと号ふで考ゆ故ふ仕出
るあ人 不猫怪 ノ文 とつるく育の怪ふ恐ぬた
とそて此此の実拵を出云ふ考め——

出集茅滅後ふ再法出も恐れと出来丈
州を面まりそ苦猴の候ふ拔りられい出
て消る事もあり候ふ出入る事もあり丈
時交凡拔りや——井間度も猴度も今云
るそて京伝ふ大切のるやあれて見ふ
て犯茅と生所く伝云のるふ甚猴の白れ
しそ倚強て未来野者の狭い為めに——下略

享保十三申正月　波郎白拙

因伝の凡日猿猴を法むと舌出祖茅と宝
拵の考ふ滅後の白ふいるふ猴きぬ聟
人もあり手の考出白敗ふ炭俵ふ出くる
を再入セ——ふと考ふそんるくく又猴み
の実を紀くと死れ拔の技ふ猴ふの
ふそ茅一代の艶紹すて花実全倚強ふ
弘長強出一ア ふ止れ猴ふ炭俵の考を補ふ
と拔ふ文育の云拔ふ伝法を考て初の強

きる中炭俵に止る意と云ものは那さおにあり寸　下略
無智なる事を此條に記て云
▲白拍子が恋は歌人が夜果を惜む笑中の
刀もて而して又比れに残人口を閉て再離
七すに何れは文の意実を去り寸倭国に
至請し而に云を荒して少く論しれも孫猪
を法ちむと云ふものは訳云歌に積しれ之古
ちくとも悟るも滅後の句と云ふ所の事は
芭蕉翁の係文に或ひ尻るもそれ前に論ひ
より句再入の事は他社の俳諧及詩哥の
法等にも係多くれと実に編入の句を
再入せしは稀にあり
大年や秋子俵のさしなし　万乎
下毛平右　裸なる編入もある年の暮　李由
年の市誰をよぶらむ羽織殿　キ角
此羽織殿と云ふ無名の作は只一句入てこれ無

きなりに秋子の句に編入と志あり禅きぬに
羽織と読る革上記下の段に編入の句
を求て入しは祖翁の功力之許云宗陀法は
此る事を述たれとる年来の人は化に及ぶ
て着るも志も何れも一固の俳志す大
徳の因より再生して此世にあるて始て他
社に至て後世の宗法とあるむさて撰ろて
実炭俵の意は只文章のあやにて彼
と云意実なり寸撰ろても炭俵の実と
いふも同じ筆者にて撰炭二集乃中
あるの一風作といふ事を読するに一個子ある
ものは定に挙する芭蕉翁に志すし読さる
を廣ちに而て凡史の目に見えて見に或ひ
其此翁の白和もよ比しは為たる哉云すてれ
旅寸をかるものれいきく人は此を止て稀とよ
るしきとて由なきることなり寸撰この社

芭蕉代の俳諧蕉門の系譜は一部は止まり
とゝまり門のこゝろ中は人々の心
ゝれ歌はさるこゝ端は振舞をうて
梅ゝれと寄るも赤肌弁也
八七子後 十三ヨリ芭蕉の病床は弱付ゝ作る時向日
葵の葉を入るつきい多。妻あの葉うゝ
ひきや芭蕉日仏ゝ宜るゝ。宜るゝ侯我家の
他世を求ゝるゝ求むゝ（句法ノ樹関ノ系まち）
記を口きもせむゝ口ふゝ多ゝ（集くゝ湘ゝ）
文ゝ古の寄人の寄を多ゝて寄
詠人多ゝ文時代ゝの風を考ゝ文風を
我おゝて寄ゝ詠ゝとゝくゝうまゝよ
一系をゝう（配かゝ古人の記をまきて）寄
詠る人いゝるゝ尾ゝて生涯系寄
ゝう人多ゝと笑也我系の他世を学ゝ
むと云ゝ仏ゝ我ゝ系ゝ（人ノ花ニナツミテ）

寄先情後ノ法ヲ
紀乱スナ広ゝ 初ゝ人ゝう上座を寄又お
法ゝ仏ゝの系ゝう系ゝ尾て系の風を
矢ゝ寄ノ法（ノ脱）去白ゝを好むゝ（ゝ他ゝ）
寄ゝ芭蕉の金云ゝの系ゝ拾ゝ安定ゝ
正風の他世を記ゝひゝてゝう大ゝ家ゝ三変
ゝて後ゝ日出ゝう上座ゝの風俳を
日ゝ家ゝの系ゝとゝ之ゝ風ゝ
一ゝ（後云）寄方の付れ寄ゝ
老ゝ系ゝ（新向のお病ゝ肉ゝ生ゝ痩
ゝ句仏ゝのゝゝ皮ゝ形を
痩ゝ衣ゝを作ゝ赤線ゝ文
皮肉ゝ時ゝ法ゝ風俳ゝ変化ゝ
ゝ時ゝ句ゝ文ゝ一世ゝ俳を
ひ一部ゝ作ゝ分ゝて一ゝ二ゝと移ゝ
時ゝ大ゝ変ゝ仏ゝれゝ文寄系ゝれゝ仏
ゝう正風ゝ系ゝ文ゝ試ゝ芭蕉

今九月も相変らず日毎月毎に彩
る風調を厳めく時の人様の炭俵に
止るべきに家に芽ぐみ人皆の心得を
以て国宝天私の万に箱も子宝年に
て来年年々自ら閑室に入れを作来
初めて移りに移りて移らずして全潤
ひ炭俵に絶えず厳れいに絶えむして正
風の本意なれと思ふ事ならず一
家むまく次第くに絶えに移て果い鵜毛
を焼て大千世界に厳くまも移くに絶
筆も尾長に用ふと雲のらむや閑一葉
に固一寒稿に勝する人の手に山水自然
の色に彩に時造化の変を手に取
むさるる能に歩に門人の庵に方一
変ふい独すに後の庵りをそれも正
風をとる手に来稿のよきれす許に

門に隠す世俗炭俵に俗を手に箱滅
後の変化を考る中に木因に延宝天和
弐巻を選択して行件の体を起し
支考涼菟を一変せし滅後に除り
の古稿と称せむ熟今世のあさまと
惟に交に一変あむとおもわえず
常くに万の子士只く祖一世乃
間を初に一時稼に伝て元を孕き
文行偽に後乃千古を字正乃
但とせむ祖所の此稿も拾千て
自己を伝へむい実に知る言に多む

八九万空てる中に柳条箱

西花坊白氏柳に白砂云の古義の万ら
桧皮葺の反に行枝おきて指出るの
八九万も古に弘りて来四の隆に多む

りきあるひとやれい義日天仏のあるうて
やうる柳を天竜ケとやれきり▲アく言発
柳ゆと仮て指のくるきさうゑ柳の上
を降るる西のりきさあ〜八九百丈の
宙ケまうそうあるを指よおもあ西と柳のち
きうを舞りる此之柳の中ゑ降ひも枝ふ
ゑ隠れたたをるも掘目うぬかゑくぬ
指くゑ西を八九百とつそ〜柳くちもうむ
う又ふる時柳の限とくあゑ西ゑ目の乃ゑ限
いナニてるもあひむ何もてもよ〜
○先注 柳条の風ゑあひきてるゑ指八九百も
ゑいそゑゑ西ゑるやうゑ九ゆ老伊のあるゑ
うきを九天とゆふを柳の枝ゑる指を八九
百ちうりふるとゆふ新ゑゆ「柳の条を吉ゑ
ちあるとゆあるゑ新ゆも哉の正文を考ぬかゑ
ゆゆゆい柳ゑい分ち八九百丈てゑるゑ「ロ」ゑア〜

うき柳ゆんうてゑ「ロ」ゑ「院伴云を陸て哉」ト
文る格くれて掘ゆ柳ゆ彫ゆト伴云う哉〜
院く時ゆ丈上ゑ院伴云の辞ゑくて云作間
ぞ草屋八九間楡柳張後簷ゆ竪横
の遠「柳柳ゆ八九百ちて丈るゑゆ天地の連
西ゆ八九百ちてゆ丈ケゆ白髪三千
丈と申て化ゆを月をまそ守注考く
□ 東乃孫社畠ある寺 沾圃
▲右門の柳社八九百ちて医平うる西ゑ
原てゑるちく一方くさゑとゑひく伴ト丈ち田
泉の孫を付ちう考ケゆ鳥の畑ある声トゆ西
の降出ゑ袋考く夜鳥の柳吹乃守風ゑ傍
一ゑ巳友咽てゑく指村ゑゑの門おゑむ
△畑ゑ丈ゑ乃ゑ丈ちてゆ丈ゆ合ちうきあく伴下
保ゑれを「イ酌」ト号ちう ○先注 掘ゑてゑ白
を伝れ考ゑき指く

■ 初荷とる事も好の相撲にて　五位

▲おなじ去の為まま去の為ひらきと足と更布の拍
を付く　初荷とる事も好の相撲にてよ
市ゑき左ハ口の畑乃を為相の海降きて牛
引やはら妻と風連て出る拍　固左口ハ上

■ 門すまきたく映乃振り　上国

▲おなじ初荷とる事ハ事も相レテ好の相おり
忘て来タル侍と又左ハ客の路を分く
り門いどきつく映の拍ハ　辛と分ハ拍
きて手代下男乃手整結あい拍客よすれも
大勢にて上きて下ときつくま書く変ハ手代ふ
降の乃事の乃ハ手始の山地と発国て仕と
相撲いあく拍て書る拍の逆分く　○
固腰を乃ハ拍ハ

■ 叶るゝ日和かきまる月の乃　佑

▲おなじ門いきつく映の拍ハ　凡二ハ詞と足と

足拍て出る拍を付く時ゝ日和ゝきまる月
の乃ハ記ゝ事ハ明月ゝ足て時ゝの乃ゝ降
しかよ今青の客様ハれとゝ乃ハ時てモウ去
日和ゝ等れハ門の乃ハ拍ゝ乃ハ事と簾用ゝ
する拍く　○固時ゝ付ハ一段ゝ

■ ぜんまい枯ゝ孔さうゝ　義

固おなじ去時て者を保守映秋の作ト足と
更拍の拍を付く時ゝ更枯て孔さうゝ乃ハ
去ゝ旅ゝ人の果ゝ者ハ山を叶ゝ乃ハ
分泥て夜ゝ者ハく和ゝ乃ハ　○降産おなじ
ゝ乃ハ白去足と孔ゝ

■ 偏拍もとゝ者ハ風ゝ次ゝ　り

▲おなじ孔さうゝ乃ハ風ゝ作ト足と更拍
の拍を付く去ゝ者ハ風ゝ次ゝ
ハ南禾南者ハ次作ゝて手次ハ去
ちぬ山中ゝおりゝ者ハ風作ゝ　○固拍付ゝ

月下に式二あるる秋月の光景にハ哉の作也之

□ 孫ら抱とる祖父の借銭　芭

◆前句ハ今年ハ凶作なれとも常ハ豊
佐田畑も有ると勇業様の体と見立ニ家督
の移を行せり孫ら抱とるなどの借銭とハ冬り
子失ひし者が様などの謂ありやうす涙を嫁と
抱月定ぬ今年の凶作借銭して貯余
ふるを耽に於て衛一家の孫子お孫定之ハ
る移之四などの借銭されと引受る孫ら主
なる故に孫よりと思うる卑の子が子作り

■ 探り子如くてあらる旅刀　翁

◆前句孫ら抱れ借銭を引受れハ自由にせ
之寺ハ指と見立前句を移せり探子よりく
てある旅刀とハ村長の内からむ分家乃
伯父来て弟から次ぬ旅刀を付て給も終
と為係するをイヤく納めて生らてハ入用の
おもれハ出さすと今更る程とハ身の具方ら
ある甥の代に生まれハ借銭ある身家
をか負ふてハ出んきて見とも祖父母とも所ぬ
ぞとむくの孫ハのあ手の移の道行之○古人
まし年さらる年ハ 評注 ありなとひ生きて孫の
難き指え出ると皆人遠之

□ 猿を仕まく村はや旅の脇　沾

◆前句探子とらえて我旅刀と移すらる体ト
ろ見立ニ猿刀行る用を行せり猿を仕まく
へ先や旅の脇とハ安永のすり押手作より
て刀子の指旅して流ちの存さまされ之
旅刀いら年と正月さしの探指古はされハ
程多きあなさのと移して危くと此つ村
ふち行付又探指の用あらする指之 古
正月さき指を四て探指ありき意にハよし

■ 狗衆の小笥一握菓子来て　芭

▲ある人やはに歎辞煤掃仕て候ふ不
はに付こえたる行化の不を付こう煤掃よ候
たくい兎食好の乗屋底こて逗留い彩理
の挑おこるる日小考れおい何日よ拘束
と約セを豆肘ム寄て一挽拘束れいセろ
く行おくいきむりて兎と西の屋よセ
むと掃をる拘く会おをこふ候と人ちー
あよ今ロ食ホを付るる宮住く

■ 十五ちろの余広く出ろり　り

▲ある約束の小考一挽売よ束でヨレトエ
力八又仲ト人ちに南ーき用を付こう十五
ちろの余広く出ろりトハ独居の小考人
こさる旦那ろ小考教れて拘人よ挑ー
ちに豆をあく拘束れい今ろ〜拘ろりま
多いふおく売て又明後拘束ると約
束て西子拘く固快を不快よ約すはよ

■ 盃孔拘ふよ小砂埋て面白き　佔

▲ある白出ナレ又去カすりちろの余広く出カく
り広白と人ちに乃の乳時を付こう盃のちよ
小砂埋て面白きトはぐ快き尼五月の安中
のお泊く〇固郊外〜郭〜こう広八一段〜

□ あさまうつあと門の出付　苞

▲ある白盃のちよ埋る小孤を面白る時人の
京トえちに更坊の拘を付こう天宮ろうあと
門の出付トハ階低き去をこう門の内よ京の
戸拘くる付林中の屋去く明友よセろ
ねとえて至のんをこ〜固蒙求前渓蔣
翁舎中竹下用三逕唯故人求仲羊
仲徒て遊ぶ侯を合りむ広り〇陶淵彭竹
考こう合て国れぬ拘よ宗ろる面白とふ
屋去とえて門低き京を付こう広八水こ系
よ埋む広八考こるるあす

□ 伊豆へ流されさうあき湯坊五　り

▲おなじあさまうみより門は紙捨くる体と見えた
其豆を洋する向を付さう門倦きに世禄のま
ちく住おれいきるの湯坊を見られとも
住うれい出て伊豆へ流りむ其後さうされ
い其時ちく和尚のりえて門の玄関をイく眺め
全体湯坊めくとさくきても我天宮ッは
納ぬ屁迄ぢやよく人の天宮のセとやくと
と笑ッ乳の毒なる拾ッ所ろ下行むの白
を合さう所○固れ茅の記消す秋あろ
うき体に情遠ッ

□ やつと宇出きて京乃乃連　芙

▲おなじ伊豆へ行ケム時ノ坊ニ居シ後ハ文ノさく
ふき体ト又ち仮きく拾を付さうやつと宇
出す京の乃連ハ京乎湯の雲水ハ出後
ハ故ちくま紙医くきと伊豆ハ湯の坊ハ

去巳めさひと京乎の連誘て左右宇ゲて
ち伯母の出る拾ッ同やつとてにんこてぞう
やつかうやらく所○固居不知に浙く

■ 乃乃ハ後るくむ乃乃あひて　義

▲おなじ秋伊ニ独出ユク金中ニテやつと宇出す
京の乃連ハ白と見た其後の拾を付さう
ヨハ京より五七り年立ての人ハ三月九む
うさげのお分拭年ちのお彩供をて独秋
伊ハち出てま誠ろて秋巳ハ明むとする比
迂橋の白ぬ有るハ明の彩ハ見合て見
有ぬりきハち止体ハ伊後より来る四乃
いろ地くと見るハ同一来りあれいき同乃む
ま御ハくち立て乃地ハ居れいあ人毎ハ乃連
同ク時ハ成りき人ぬく彼伊氏スマの毒ハ
乃有の月ハときうむの木も衛感見て
僅ある本張のハと面白きトカる越も

似くむと性しの如く指く固有出の掛指く
熟すと合い月を見色を第一作はいはし
○屋匿示上の乃至等て敷まおろ有り
きはは性口く変いを所あ寸

□ 又ゑ寸は指く和のたえに　佔

◆おの白形の附型は出ちの張又る作と又ち
又指の用を付ろ又ゑ寸は指く和のたく口は
老の形記はちの張形苗代形又は出月ら
けは遠乃指く○固有むとて芽出を何ふ
はは水こコハ侵経あ又

□ 妻云云て先成れら作を文　芝

固有白又るゑは指く和のたえ口を又て又
人の仕合を性す作と又ち指く和柄をとセ
ろ片り◆妻云云て先成れ作実とは苗
代又ろ乃性同士の出合形は晩の芽
云云作てあろ代指の生指ら作を文

とく又ちのめてられい先ア人ろとるで
あろ熊市や寅内おろ成まんとお矣
て角る指く△れて又指の性は熟向れ民
孫語をて姿をちるゑ定法之又乃性
の合のつる去仕入は張る角は妻云云と
作ろ代るゑは印緑は表一

■ いセ乃ト向は角つろと逢　り

◆おの白先字才一の用を指る作と又ち振
は対角の指を付ろいセのト向は角つる
りとあひトハセ条作は引弟ち云云と
いろ寿と同き殊云あろ一度ゑりて
作ち文は れ ら先ろゑ弟ちおは紀
セーと性す指の逆付く○陸図あ指ろ

□ 出指は小拳仲るのそんくと　佔

◆おの伊セのト向ノ例帝使は大名ノ角ろ
と逢ち白と又ち又指の指を付ろ去指は

小峯仲右のそへ〜と八左衛門上の大久
の御帯刀下向と守て社毋ゟ長山ゟ常
ゟる先者も拾の関辺ゟ立り合勢れ
通のるそゝろき降て侍よりけゝる拾
○此作はをゝて盗ちゝ○されい家ハ合致
の光きそ西き加教ナトする歌○固女子逮
とゝんてそゝろく〜と分くゝり侍ハ收ロゝ

■ くゝろ〜りと雲の時る青雲　義

◆おゝ白ゝ拾ゟ小峯のそへ〜ゝ
ちむと年ゟ仲ト八左衛門ゟ
りくゝ〜りと雲の時るゝ
領ゟ問屋拾役人のモウ取ゟ
そそ〜拾ゟ北ゟ拾ゟ○古体用
の変ゝ御ゝ余時をゝり侍ハ拾ロゝ

□ 浮ちる一日拾ゟ砂の上　り

◆おゝ白ゝくゝろ〜りと雲のそゝ〜ゝ拾て大時ノ者
雲ゟ八左衛門と八左衛門ゟ拾の拾を分くゝり浮ち
る一日拾ゟ砂の上ハ固蓮池の辺ゟ英教
ゟる拾文の友ゟ〜む世芸をゝゟれ器拾
ゝて悟ゝの仲八左衛門ゟ侍ハ

■ けやきの角孔そゝめ男穴　芝

◆おゝ拾ゟ字砂の上ゝて拾役ゟ侍する体
ト八左衛門ゟ侍ゟ拾の拾を分くゝり榛の角孔そ
てめ男穴ト八ゟ侍ゟ八左ゟ侍ゟ生皮男の
のゝよゝり〜ゝ〜ゝ侍ちむと八ゟ
を天ゝゟ侍ゟ八左ゟ侍ゟれて八左ゟ侍ゟれと拾拾
と遠て榛の尺角ゟれい一日ゟ侍ゟ穴一
つ果ゟ侍ゟ出て若ゝ也拾ゝ固女侍ハ
ハ○固榛ヲ板ト浩ゝり板ウキゝ

□ 侯出の手ゟ懐ゝ盗ゝ侍ゟ也　義

◆おゝ白ゝ侍ゟ果ぬ男穴ゟ侍ゟ〜世の業を
飲する仲ト八左衛門ゟそめ用を分くゝり侯出

の外は俵を置ふ也トハ俵辺ある住吉社
社造りは置る大工の毎日く置ある
住出俵は外の岩社祝きを入て世ま
教ふ〳〵分の辛苦を忘れる拾く固後日
置くに成ハ九よ〳〵○[守辺]丈辺の拾拾に成ハ一段く

■ 別ぬ嫁ふ〳〵原寺内徒　佑

◆ある所へヤル不ナ候出の外は俵を置ふ拾
に向くと丈を丈お人を付ふ別ぬ嫁ふ原寺内
徒トハ武禾に家金借〳〵方巻寺のみるを候出
て猿上せする者〳〵大拾中ふ成する武
嫁の望拾ふ者ふ者ふ原を原寺かく〳〵
世界く○固禾さもて拾る成拾ふ者く

□ 月待は朋峯庚乃お拾　芝

◆ある別ぬ嫁ふ原寺内徒ノ拾ナ拾へ
成ハ仲と入を丈人を付ふ月待は朋
峯庚のお拾トハ月待はふ〳〵原原の小

注者は俵を集く中家の主婦て歌の者
て美又する拾く○固成門は表を物る者
成足く[変]武二百表成ハ水之

□ 去拾の菓拾ふ名字拾く　り

◆ある月待は朋峯拾て拾無の仲トハ去
丈用を付ふり成の菓拾ふ名のり拾くトハ
面く者くは月家ある人を厚て待者は
む月又の原拾拾く

● 取て来て栗も拾も椋(ムク)る声　佑

◆ある名字拾くの菓拾る候拾トハ去
中木く多き拾を付ふり〈菓は菓を付く
る也宮家い名字拾くトハ七福神原平成去
まの仏菓トハ[月桂]は入ち[一]青山は頂め原井
の秋乃色トハ東都拾木店の藝ひを付く

□ 拾俵を入る家お乃拾　義

◆ある門家の拾くはむくの殺るを入て白

帽子より前を長くする尼口の服装を學
る間ハ人を等閑に成の振を付さり 俳優
者の望の振ハ振り上人和と入来の俳て門
あり舟て俳優の楽屋ハ近入る振〻△
様子ハ改九く肩を出白て丈金房
長ち〻固門前の木とて楽屋の俳ハ
○序注丈ちの上人望て出る俳ハあ〜
■ おぐやうよ出刀板の長弁 り
◆前白俳優の出て大原又ハ西〻菊井の俳
ハ人ち丈物の振を付さり家あて乃等閑
の西くい家あむ〻ハ横物中山て振を
白川の北東丈川原を南ハ中山西くハ
後れる座俳優の長きと望る近板く
菊武物引文ハ西〻ハ〜右の方ある出刀
板さり切そぐを〻〻を風次風寸ハ客を
乱て狼狽ちるハ〻〻の出刀板ら

と附ハれてをり む振〻△出刀板ハ長合と
ちめ者山の横ちハ出ハ物一のを乃
あれと後狭て板ハ国あれハ少日ハ地
ハ後ハ多人柿あるを古人能知て仮ら
○固板のハおおの丁ハ武地を考あ〻
■ すぶ〻ハ星の出れ〻ま る 芝
◆前白平家ら上さぶ〻我るの出刀板ハ丈
ち丈物の敵を付さり瞼ハ星の出れ
ハれハ後引瞼の星影廣沢の地ハ移
天地ハ星陽ハ日ハ〻ハ芝西ハ夫ハ体ハ
日ハ〻ハ旋物畑ハ畑ハさぶ柱四〻物子横
柜鞠を和と載出る女の出刀板ハ池を
陽ハ〻ハ〻ハ〻ハ星を載て出ア〻
星を載て陽あき人の外ちて出れと古
後を出て陽ひ振〻△俗年俗西ハ日ハあ
ハを半分て考実ハ後を移ハ日ハ

あき人仏あり人冬年まうへても牡丹一戎人
日俗年の板ゑに星さあれすやそ日昂方
て文ぜ力板ゑ係むま年まま大文字山麻
不山ゑく医年て験ま星をもつ形客臣古人
の他社跡あすゑられい文人分の毛を絲
ちゑゑ戎人り

■ 引立てむすま翁するたをやさ　翁

固翁の験ま星のさあれをるとく愁を食む
婚態ト又ち浮辺仏ま係ぬ用を付ゑ引立
てむすま翁するたをやさトハ大月のれ翁ま
百里一さと部れとえゑ立生くもあ
ちあ分あれい侯ま むをひゑるを天月姫て子
でゑゑ我おそやら百む旅あるあれ引
立て翁せとあるまワあ立てまふ姿の
狂たをやゑる吳人の秋ゑて彼ま星の祇
星ま風せ教部の移ま翁せ侯ゑ侯り

□ 北ろと大入ま房す拾　お　佑

翁の引立てむすま翁するい香る蕊ゑト
又ち浮お文宮を付ゑうそろと大入ま房す
拾おまいゑむ跡てあひむとんを痛る風
情哀ゑて行後臣さる人も勅ゑ拾ゑあ
翁ゑるをや　○固又ゑる人ハ悦ゑ

□ 花いすや殆あ去ま昂ゑて　芙

翁大入ま拾て宮を楽む雅人ト又ち宮
翁の脇を付ゑう花いすや殆あ去ま昂ゑ
てトハ去年冬山ゑれ上ゑ脇て侯ま
ゑる月日いゑれとむ又てゑまちそ
ゆきハ古寿を見出て我力のちゑ方を
あゑふ拾く固去あやゑる拾ハれま
□ 俳氏のちる侯ちゑ乃ゑ　り
翁花の侯を嵐山のゑる去ト又ち大月川
を付ゑう七氏ゑる侯ちこの侯ハゑ相浴

ろえちの字も大ぬ門い七夜の一ゐるかよ古路ト
分て宮山を字さう△芭蕉集中文二つ

蛩の字や搗うて居る石の声　芭蕉

▲庭十夜芋ゝ山ゝ小ゝ日ゝ杵ゝの聚居るさうて
蛩の字や夜長り搗て居る石の声ノ臼ノ
広白うて蛩の字ト作くる広歩ろ

● 照坊ふの屋敷面白き月　伯木

▲赤白鶴ちの居て葉る作ト天点屋の紅葉
のあ月を分さう△面白字形ろと家ま
字広二重を分て□ろ庭ちりめるうわの
奥山ト七ハ仕くふ古えて居るとふ宮あむ

□ 古家を買てもんれい秋来て　りホ

▲赤白照ちの屋の面白きモチり哀ナル月広
白ろえ古宮来る秋の紅を分さう古家を買て
もんれい秋来るてトハ屋の面白き作ま住

拵家あるを求て移居する雅行ま月日ろ
て移住比いすや和葉ちりて只来る西く秋
の寂のゝ多るまア歓乐極分哀情多広ル
秋風辞を賞する紅ゝ○固二百やゝの付広ハ
面白き広月ま住ロて来る秋ま人多き友ゝ

□ 多ゝ〳〵多を歌く耳囚　芝

▲赤白鶴ちの古家を買てもんれい秋来て宇
風多ゝ作ト天点広分商を分さう多ゝ〳〵多る
を歌く耳囚ハ囚の小麦ろふもひく積あれ
と来ろく潤多い先耳囚のり灯出ろる
往来の小店の紅ゝ○固多ゝき当広後
白の歌ゝ

● 古おけくる芸ゝふ子供五六人　伯

▲赤白多ゝ〳〵多る耳囚歌てる守の要さす
作ト天点五五の口ゝ〳〵分さう哀おけく
芸ゝふ子供五六人ハ村多の耳囚造麦

除の芸和と伝要するを毋のろ寺よ子伝集
てさビ喰する拾く〇固卑銭の拾仲用の
変ハ示の又換の作ロく

■ 莚を敷て外乃伝ハ　り

◆示白吉おけ字畑の芸社去拾為てく子仲
トス左ハ支よ敷ての用を付ろう莚を敷て
外の伝ハ畑端あるきて泥まれよ家
るるを莚の上よ抱上て此く足伝てやる
拾く〇固示い合るの踏あれい歌く用固と
又宮子奪ーろうハ去莚の祭よ敷ろ後

□ 悔されふ乃一歩の又換　芝

◆示白拾ニ莚を敷て外の伝ハ瓜男と
又左市戻を付ろうコハ市左の小苟人と
廿乃伝ハの㊀拾玉ワれ苟人苟子やと
見ハしイヤ何麦おのすつむ孫ハ歩一リ
元換悔れと仕方固さうでるんと苟て佐

分よろくさのよと性さ拾く〈莚ワく分陸よ一
アの換よく為てろう固市佐ハよ

□ 清快さんでなるぶうする　佑

◆示白一アス換て悔むい店別ぬ小老ト又
左ハ市の系の拾を付ろう交伏所てなるう
するトハ伏日なるス交伏拾束る左示の狩よ
ふのろを浴て作れぬ分ぬ初て気の毒ふれて
秋方く作ろてと狩よれむ田舎老の正
巫る拾く〇固悔む人〈下女の楽てる収
てなろる自他の変ハ挽象〈

よろとる本茅の天気家老ハ　り

◆伏白よるてる茅茅の天気乳老ピトアス
系別てなろる拾の足分のやりるとれど気
老ハ・ト作ぬよ一向分ぬ白ぬろ分コチ気老
ピト巫ハ浴く付ろハ浴方固全体家を常
のなスハとスハ変化ヒぬるハ付ぬ先ろ気

うさゝん文状あくてゝ庁時も勅ぬい廊
生ゑト鼎体よゑ左折者如斯夫不舎昼
夜ハ古語を俗語ゴ抜し詞を含て□主るお
れうとき係の所行よとハ憂おやゝ夫の
るも一日〳〵と云てんよ侍さ[illegible]うき勅も今
い刎て者そる拠とかそゝむ

■ あゝふり[illegible]さる固方社客　英

▲右白奈向やゝ主ノよゝてる楽おの天乳
乳[illegible]ハ詞と又左丈逐云を付さうある振
志[illegible]る玉方の客ハ姫て束くる舩ハの古
奈亜よく実稜て大板中の性ゑ[illegible]我ゝ生
ゝゝ又稜やそゝれと教むを[illegible]拠ゝふて
後ゴ束て傷むとゝふ下んゝゑゝむと乳を巳
て表及く楽おの詞て自すする拠ゝ 百
初云ゝゝ又るゑ抜をあふゝるゝ[illegible]よ

□ 何るもゑくてめてゝき約定　佑

▲右白何る拠ゝる分り玉方の客ハ勢人ノ性
と又左丈次の詞を付さうり何るゑもゑくて
めてゝき約正ハ亜ゝ束[illegible]弱引の傳ゑく
弱ゝ夜詞ゴ渡て甲変伝傳の客庶へある拠
しても一向街きちぬあゝさゝぐだうて何
るもゑくてめてゝと宿の豆社天ゝ稜
を性する拠ゝ 百 玉方とゝふを京詞と又て
付さうハ元ゝ

□ 風ゴたきるワセの枯社月　り

▲右白二百百モ何るもゑくて通るテめてゝ
き約正ハ白と又左訳所の拠を付さうり風ゴ
たきるワセの枯月ハ八月上旬ゝ弱引
の国ゝ後ゝそゝ云ゝ二る古ちやれとそよ
と吹ぬ有ゴ云てゑゝり先ゝ何も宿て
めてゝ[illegible]とワセ作るみの辺の村民の考ゴ
拠ゝ彼地ハワセ八月ゝ中ゑ九ゑゑゝ七月

はしく固辺に度にハれすゝ

■ 芝居秋の住ひ住うくて　芝

◆おなじ風はたすゝ[illegible]稿をよき州表あれ入る
仲ト入を京内れ五て拾を分さう書居秋
の住を住うてハ常ハ小田原あとする内
ゑもむ州入おとてゑ書上て芝よ為ゑく
ゑる拾を居街原のあゑ〜む

□ 在所の島子女房咲り　佑

◆おなじ表示を秋の月さ寺勝まよく弘めゑる
仲ト入を嫁れを分さう在原の島子女
房咲々ト八公ゝ表ひて備立至ゑ島子姫
れゑる舟「我尾いむのん社移ゑ時〜の秋
と住そゑゑ以仲居り　○固石姫よゑる
ん居住日ゝ

■ 明ちゑいやの幸附の手紙　り

◆おなじ在原の子社支姫達を入て佐女房

咲咲仲ト入を仲ト入を芝姫きを原乃き用を
分さう明ちゑいやの幸附の手紙ト八大
勢手紙より入れゑ周ま人表の表れさ
りを明ちゑれて支姫きを姫て表すぎ
「子供ぢやと思てゆく」ゑやかくのを〜て
人の表するゑ能てゑ我分の老を為ちくと
思やゑ拾く〈志郡矢地村小加良明居社八
稚女日命とゆて天照を神の巫姫とゆく
り社地に居ゑて松林孫ゑ女房ゑ
女神を教向明果ゑ為と住表を分さ
ゑちり届さう固ゑ

■ 蓑を表くこのワゑ一位　芝

◆おなじ手紙明果て名咲ゑ仲ト入を原乃
性を分さう手〜手紙ゑ西〜古風乃
歌又こ所を原の表孔突ゑれをとゑ
用表〜ゑ時ゑを度き休む時ゑ尾〜く

を人の入て自由をおとされいけ敷又拍子
のうまご(四)諸沢あり敷ぐの器入よ
逆よ云て(五)ぞて凶を占ひ文よう身ぞ物の
敷云よ用られとうのい乱の口(七)ぬ一徒敷
てさこき(八)よ移乱の敷も国と伎実て
「よき(九)孫こ(十)ぞる」人を弱ち守拍ち○固ぞる
持ち(十一)敷ち

□ 俵米も志めイて亦きむ蛍　佑

▲ある日乱とる丁推よ乱ら口ろい九森ち寺ようの
きて森よと(十二)武そとア志(十三)文物の拍を付ちう
俵米も湿て亦きむ蛍トハ村ぢう化吸文
物るたむの居よ各体ち(十四)けの面よ下横俵
い湿て亦んと性ち(十五)拍米おろ(十六)れ敷て乱
ス子よ今ち(十七)ぬきて森を雑活の拍
ち。不用の湿を仇て体字を使る有よ迂きち

□米員の各体むむの居トセハよく少えみむ

○固(十八)面と合てらの(十九)付ち(二十)ち掃系みれと(二十一)け白
の内ろい(二十二)居ぞ寺白作(二十三)医待ろみれいち

○ 去葬ある(二十四)年の除　孤　り

▲ある日俵米も湿て亦きち(二十五)為上物トス志(二十六)
川谷の孫ぞの面よ除おおき拍を付ちう
(二十七)ぞて仇ろてむ蛍(二十八)を付敷ち寺(二十九)ぞ(三十)むの
ち(三十一)く俵米も(三十二)拍も寺ち人の扱孫を亦ち
湿ぬおを湿てとち(三十三)武河と入志(三十四)宮て
志れぬ志孔三月トセハ「橋ち木の下居
オ亦ち(三十五)て(三十六)い寺の月無するをちうあむ

□ 寺の乃ろい志ると掃弛ー　芝

▲ある去呆ある(三十七)マミ三孝イトノ年の除ゲセ
干ル仲と入志(三十八)雅人のお荘を付ち(三十九)寺
の乃ろい志を掃弛トハ加文よき(四十)孫除ま
徒干ろ由く乃(四十一)ぞち(四十二)志掃ちるおち加
姉く嘲ち寺の志掃弛あちを孔ちふを

又て狂客の風無すと雖○固ニ彩陰は干
こる仲秋の字は陰セリ此ハ五おこ
■ 去ぬ合点で放うてみる　佔
◆ゑの白号の乃さけ言を掃除さい居すく
いきんとき仲ト又ち云ふ乳房を付う考ゑ
ぬ合点て放てみるトハ乃ち快られも
と号れるを付ゑんは掃除生来るとを
皆来られい先死ゑぬ猿まうゑを宮てと
おゑちふ招く固快き日ハよう
■ 夫こは赤ちの老と中あく　り
固死ゑぬゑんて放てみる模ゑ老ハ何と又ち
かり人待る招を付うり◆夫こは赤ちの
去と中あくよ倍〜釈方ゑの人ゑむ抓ゑく
号うゑる赤倍ふを乳の子まち張ハは悔め
て芽をるとや〜困さち居と逆く招く
□ 三湾敷賀の荷れかさむせ　芝

固ゑの白夫こは赤子と中西くゑる生代去
ちゑ乳房又ト又ち云ふ◆仲秋の招を付うり
三湾敷賀の荷孤字ゑ居むせトハ何ゑ今ほち
海ほの舟向乃ち就ゑの荷おの宮ちを船
改の積ま束き彼い兼ゑ去ハ乳ち宮の
斤文云てや〜めを利の夫代ちれい倍よ
溪ひてる古ち居ち考ハ乃と只又てみる招く
■ 汁の実ま去まる茄の出生て　佔
◆ゑの白荷の乃さむせ居ハ高多く来る仲ト又
ち云ふ乳房を付うり汁の実ま去まるコロ茄
の出産てトハけるく〜お客多く代居青
おゑゑく困〜をモウ茄ち生産てれい乗ぢ
やと茄切ゑ〜性千招く○固乃ふへき附
そにそ向乃の仲ハ一段ち茄ち荷おゑ寺
□ 毒〜む麦を先刈てとる　り
◆ゑの白茄畑ゑてモウ汁の実ち沢山居と又ち

作人の用を分ち毒むむ麦を先刈てとるよ
苏社亜畑の麦刈あ〳〵けり「訪く伺柱む」と
ん二面の拾く固左正の仲ばれ〜

■ 〳〵まちの拾図を平亜〜　芝

▲おの白先刈てとる旨不宜あれる其畑地は
用ある仲ト又左」家造お茂を分ち〳〵に〳〵
まちの拾図を出左ト八乃ままむするまむ
何亜い家くちむと浮文匝あれと何き麦
畑を造行る横あれいとまれか〳〵まし麦い
熟られまと刈ちする旦那令合の拾く
固刈訪くちるばよ〜

□ 茂乃おち社あとい寂き　佔

▲おの白〳〵ま拾図出左さい係ま浮文かそり
仲ト又左」文由を分ち茂のおち社茂いさし
きハれ由弦ちくお茅おて大彼を歌ま引
ば考附あむ由伺おられいお朱ま教て集

ゐる七ま人の若い家れちやよく拾図調て上
茂ま俵むと浮文するま教て時の拾くゐん
ま中殊おもてまふ恐ま〳〵にたく〳〵と呑人の
さひゐる拾く○固狭くもあるゐばば恐と

■ 殊ゐてまざれ分ぬ小商　り

固茅ゐ茂のおちの茂さひきおるま悔ト又左」
▲不亲乳を分ち〳〵殊伺てまれ分ぬ小者ハ
茅中向おの小店出ゐる人と伺ば若い大方に
戸りまて勢の仇茂されり拾人西

□ 卑ちて茂ま人彩ま　芝

▲茅ゐ殊ゐてま店出ニれ分ぬ小者ニマアル
仲ト又左」人の手伺する拾を分ち〳〵ひぐて
茂ま人彩伺ト又八殊伺茂方の拾ま手伺
ふ恐正の拾く殊ま追茂ちて伺ま又伺出さむゐ広
て伺ま手伺人の若ちくをり〜○固欠茂
去のかゐゐゐばば人遠と

□ 孔入て秋よあり り 者の月　佔

▲おゐ白髮よ彩髮くふ皆荒日用の夕飯弐く
仲ト又ハ行義直てる指を付さり孔入て秋
よあり り者の月ト八日中課さて働く時よト
司の殿いりも六月とひりも用仕ひりふい
夕飯ひて阿ひとヤされ支い出独ひとひひ
各孔入畏くるを三人の人てぞうちや孔入て
秋みくさのと笑くく指く○固孔ひて張さり

● 旅よおあり　玉笹乃者　り

▲おゐ夕者伐佳て孔入く仲ト又ハ拙根
の山風ひき指を付さり会伐る秋よあり り八
よ付守家源の月社孔入て佳ひ秋荒れよ
あり る仲ト嘉佐よ又ハ□拙分よ者を夜ふ
平の油ト七ハ油ひあり秋日和よ舟人の
漕とる余佳あり む

■ 芋盃い実社毋乃沼吊て　芝

▲おゐ玉笹伐る拙て候の者を出あり て
仲ト又ハ□者を付さり伐盃い実の毋社
沼吊てトハを阿よ嫁る妹こ者ひい指よ
あて出ひ□を又ハ□い者の毋よ社て世よ
仮ひき分と家独さあく教る指の逆分之
西者を出ハよ

■ 有付て西く生和の在内　佔

▲おゐ伐合ハイトてをカテフ実の毋乃沼吊で
ハ白と又ハ□西殿の用を付さりフチニ社付て
仕ハニ西く出和の在内ハ佳この分社阿主
人を求て出和よ越れい玉を陽男よ仕てそ
再昌□と者を入て支ひて支ひて者ひて
と久ふよあつを見拙て発見する指武
出絵りよ出人みくむ固ひ社佳佳七

武士ハよ

□ 恵の者ひさ帳子時の美物　り

◆ある有付て仁千也く出相の法内ノ歌ニハ
河と又ハ仕度の拾を付てり立の志れく
帳子時の英おハ捲ようれ出 支ふむ見
きむと拾ふを姑の又て居るん地合と答るを
会釈して何の居所あるまま英きまくおれてり
よんおハおきやすとひどする拾く○固仲用ハ
ハ方角へ立つく人の所おとえるて拾ゆと

芝

○ 少て乳味よき杉苗の風

◆ある改屋帳子布子附立の志れく英おハ
河と又ハ拾の日和風を付てり△伏白少て
乳みよきハ河えてるくよ上ふ百も迂ちをく
家い英おハ帳子美の志れを立ト又ハ□ま
家の手きをに高人トスルカ又立の初くハ
價ふきる子作も知る仲ト又ハ□宅員み
ちさる千俗の布拾トスルカ掛拾い千くみむ

佔

● 花の屋菜をくハ雑の箱入り

◆ある杉苗畑えきこよきおきく仲ト又ハ
英お柄を付てり むの屋菜をくハ雑の箱
入イよハ むある杉畑ふ菜ハ雑の志 乳く
よく羽風ふ苗のえよく拾く△きこよきハ雑
の声と又ハ□係付こてり

● 某田乃丈のかるく除ハ り

◆ある旅の菜くハを大乳のおト又ハ山田
の日れを付てり△拾付あれいあ〜家ち
箱入イハ手菜ハを苦ふ拾をくむ仲ト又ハ
□抜菜ハの出るいモのふハ英ト英子の弄を対
ちよりむけ老迎ちふれいきこ

勇ハ人奪引する山風ふ り ホ

◆教代る鼠ふ焼拾てり立て参おさでも独
を放ちむとする奪を引居く白く拾く奪
い付を押出す時ちハおおきと彼屋力乳ふ

すかる嵐を期るの和風を見るむ

■ 冬乃まき木のもおのゝとゝ 佔木

◆和名風さき名山張を居中ゝ仲ゝ又左」夫
物のりきを除ゝり冬のさき木の表ゝ
ゝゝハ名表名表る山の松葉ゝ枯ゝ嵐ゝ
も夫ゝゝ除て孫ゝ多絡き嵐ゝ
松葉ゝの鷹をゝゝ惑ゝ枯ゝもとするを
引居る鷹巫の人を又ゝ草 百草枯
鷹眼疾とゝ風信ハ孔ゝ

□ 大根の育ぬゝ居られて 義

◆和名正木のゝを又ゝ毒木張ゝ出ゝ
うきめ又ゝ左」畑仕るを分ゝ大根
の育ぬゝゝ又ゝ左」畑作ゝ
ゝ名ゝ教文又ゝのゝ作ゝ大根をゝき
めゝと宗ゝ根ゝ育ぬゝ問て秋ゝ
○固天根引ハ根ゝ 注 陶ゝ正風の五中義の

物ゝ意味設むとするゝ問 孔 弥ゝ

■ かゝゝ下ゝ ゝ名菜のむ秋 ゝ芝

◆和名大根の育ぬゝ居られて老ハニアハ又
仲ゝ又左」陶侯ゝ根を分ゝ上下ゝ
テズ 名菜のむ 村ゝ村ゝ
の京ゝ園ゝ老人ゝ来ゝ
くゝ大根ゝ畑ゝ下男ゝ分
根ゝ居ゝ家内上下ゝ食ゝ
うする意ゝ秋ゝ名ゝ時ゝ人ゝ
○固元入ゝ仲ゝ表ゝ根の性ゝ

□ 町限ゝ月又乃頭の葉残 佔

◆和名町の上下を歩ゝ又ゝ
菜ゝ絡ゝ左」問ゝ又ゝ左」名ゝ
ゝ町ゝ月又ゝ月又の仄の集街ゝ一町内の
月行講の要する改家人ゝ名菜の仄ゝ
ゝて此寸絡ゝ西町の上下ゝ○ 陸玄

既ヲ既ト語ラン

■ 荷ガチ〳〵と国ル次　り

◆茶白町内費ヨリ出リク人ヲヨ供ト又ヒ丈ヨ勉ヲ為ルヲ分ラン為ニ荷ガチ〳〵と国ルヲ次ハ都新ヨリ除ケテ向リ又出ヒとスルヨリ来ヒ行合テ模キリ拾ハヌ拾ハ五ツのヨも連ラントス人也

□ 知恩院のかそう社時極リて　芝

◆茶白国長の通ルヲ人て丈ヨあさとする件ト又ヒ丈ヒ分ラン知恩院の代乃時極てトハ同リの此ヨ荷ガチ〳〵国ヨ三モウヲルヨ麦ヨ〳〵とまヨ拾の逆分ン

○国二白一元ハ亜ヨ

□ 桜乃長ハ新冠木茶やく　佑

◆茶白知恩院ニ話て代の時きく件ト又ヒ丈ハの後実を分ラン桜の長ハ也で茶やくトハ

門茶の桜の三ヨ荷ラて国の〇むヨ〳〵代の時きく乃理で失大信正の桜ちり後の大信正の也でラ茶やくと云する拾ン〇国門茶の茶ハ翌ンさる宗信の分ハヨ〳〵

■ 翌板弁難ヨ和ヲを原　り

国茶白桜の長ハ也でと引続ニ李の眺拾ぬ

逆宗ト又ヒ彩理奈拾を分ラン　◆翌板の難ヨ水ヲを原ト又ヒるも深き孔泉ヨ後

法衣の斤付ヨて云する拾ン

□ 目利で茶いとんくしまり　芝

◆茶白カラ〳〵と水約て難ヒふを拾弐ヨ又る件ト又ヒ海の宗宝ヨる時を本てラ目利て茶いとんくし弁トハ古乃くの目利ヒ茶ヨ中ヨる人の広ヨ〳〵世宗るのと茶ヨ〳〵宗ヲ載て出入する効ヒ長ヨ乃失茶ンと只ヒてラ〳〵やむ拾ン

■ 状箱を後ろの花飾交れて　佑

◆ある伺町ノ角ニ見利て家いまんプしちゃトあ発
ゐとゐたをおもむ指を分ろう状箱を後ろの
花飾交れてハ後ろ花飾の仮ようれ戸の目
利ゐの内ノ状を守指ゑてまぐ宝花飾乃
よく考めいをゆの秋目利家ゐむ吉目
利お入ろうハ

□ まぐ七ろうゑゐめ日乃影　り

◆ある状箱交れて脚をの伴トゐたゑ灰ゆの
世を分ろう来七ろうゑゐめ日の影トハ後ろ
ろう解て来ろ人ゐれい門口を送出日飾を
入て為て角い何ゐ広ろゐ物ろむとろ指ろ

□ 芝の除ゑ宝の水花生ちきり　芝

◆ある来七ろうゑゐ知ようろめ日飾の始て
又ゐる伴トゐたゑ吉陸を分ろう芝のそゑ本
ろゐ知世ちきりハ斜ゐる日のゐゑま

もゐく世ろる世中の指ゐふい一日附考れぬ
ゐまゐ指ゐるを見の外七ゑ有で仕合を
有ゑ指ゐ〇吉白ゐ後ハ波之

■ 生約乃老ゑ孫とりの為　佑

◆ある芝のそゑ宝ハ為の畑の為トゐたゑ
艾技の用を分ろう生約乃老ゑ孫乃為ハ
ア生約ゑ庚ゑろハ八月の清考とて遠
ゐも考れい今ゐる赤庚むと待れの乃老ゑ
指ゐ〇為ゑ為を分ろう生約ゑろうゑ為ろ
ろゑ山孫い大和の久考ゑ「木指れ生約乃
山ろゐのやハキ角の為あり吉ゑ

■ うき振い物と連ろゐ後ろ　り

◆ある生約者て孫れ附の為ゑ庚去有す
伴トゐたゑ大和ろう他ゐ為ゑ人を分ろうろき
振い物と連ろゐ後ろ物ノ如レトハ乳ちの考く
乃をろる女の疋の人と連ゑてろうをゐり

なりの久弥を貴ぶとて生涯の面目をえて比比の務門より我出て後の母人の若男あひ了ぬ去る小もの為より長くゆく侍るゆ我為ひとと候もるゆ風流人固人者人の手より度る女はれよ

● 五月雨ちらり明ちる空　芝

◎おのゐ小もの居る実京ト人丘知りきを分ちり〳〵泥付の度ヨ実京ト人る空法を表ちとうき振ヲ付浅ちり実い為の小もを近年一件ト人丘目も厚ふあ彼の上ト是き深を丘ちふ

□ 栄舟の花牡丹より佳と出て

◎おのゐ明ちる去待ちる一件ト人丘夫人を付ちり栄舟の也牡丹より佳と出てハ市使へ出る栄舟の候孫ゝ也の名度出るを見て市丘の下記を見ふ指ち

□ 柳のさだく門をちれり　三タツル

◎おのゐ栄つひ舟の名荷丘ち一件ト人丘夫木の用を分ちり柳の侍ふ門ちるゆり上ハ川流度義之川上より栄恵木を束て恒結度九を恒丘て門ちきゆするを入て川辺の自女を見ふ指ち○ペハポトちそ記年ちゆ度ちハ見去ゆ去ゆ去ゆ改ゝ〳〵さゝ出ち栄さよ風宗を見ひ度ゆちも

○面三の一重ハ盃あゝ

■ 百姓ハ栄て世ゆも出栄さよ　芝

◎おのゐ柳の侍ふ門ちるハ好ふ但する佗但丘丘度逸人を分ちり百姓ハ栄て去ゆも出栄さよハ五柳先生陶田翁居の拙ゝ家セン陶去来辞園日涉以成趣門雖設常閑策杖老以流憩時矯首而遊観雲毎心ヲ以出岫鳥倦飛而知還ト世ゆも出

宋さうとんの侍は門おを迎をする拵へ

〔西五柳の伝に〕

□ ざすめを拵へあめ汁菜　沾

◆ある百姓よ成て世ゑ〳〵交もキガハラデんも

宋さよに河とゑた〔客もて色〕を付さうさ

やめを拵へあ〳〵免汁菜ハん信ぬ友来

うるよ茶漬出て情深ほおて時ハかるお

い自もゑ向さし〕をんをゑ〔性よ寄て客

みても蕪菜を孤すゑ〳〵あ乐ふおと吳

性する拵へ〔西仲用に一段〕

□ 夢おの志ふ紙包おろし蓋　り

◆ある汁菜ゑ乃中の蓋吸布ゑた〔接人の

拵を付さう夢おの志ふ紙包ゑ蓋ハ店の

蓋注よ腰をてくふ拵へ〔西高人宿に〕

○〔蕪〕漬おゑ〔漬さう乐志〕〔考ハんハ孝くもく

漬ノし欠るゑいあ〳〵す

七ア　七

■ ゑふ乃蕪いそよりとゑやぬ　芝

〔西ある志ふ紙包ゑを乃木張ゑた〕◆体ふ

拵を付さうゑふの蕪いそそうとゑやぬゑ板の

張よ乐蓋に〔西孔扱て汗拭て涼風ゑ〕

ひく〳〵枝お跳る拵へ

● ゑおをそふ蘇の中孔絡の声　沾

◆ある河辺の苔初ぬ日盛ゑた〔ぎす乃

うるうを付さう〳〵そそうゑ苔よ〳〵れ色し

寝い風浮さる海上とゑた〔浪むを魚を的

の孔絡舟ゑセハ蕪ゑ字ゑ〳〵て乳色ゑむ

○〔乐文〕蘇ゑ〔漬〕〔セヲ該〕憤の声ゑ〔漬さう〕

■ ゑを人ゑ云出やそ　あ〳〵　り

〔セヲ該〕蕪日ある河ゑをそふ蘇のきすゑ辺の

蓋ゑゑた〔秋の侍を付さうにり〕◆ぎす

み〳〵侍ゑ色の蓋乐志ゑ蓋き女房の路おる

ゑ〳〵已ゑ蓋乐する人の出合てゑ〳〵おの

七ウ　七

悔ひいワット泣出すを人てアーけけい云ひ
む歌を新く（挨拶）（先生ハ）（ようく）初てうき涙を
孩モ乃くわくと志ゝ（ハ）歌セすきおをと哀
くし拾く○（古）郊外よおを惜む女ハお連之
郊おのおいちてる姿おひれいみのぎすよ
□ 大楚の大活て傷手を葬モ　芦
◆おの白タヒ志ノおを人々（ライトマヒ）云出セいろ
おく件ト天志（支）物の拾を付ようり大楚の大
活て傷手を葬セトハ下女呼て奥乃
大楚活さモモウ彼も来ん坊よ葬く
セむ皆も休てあきいろく新て葬セとと
咒連て奥くゆく拾く○（八セ月後）正赤乃日支
熱の物ましてこ風活を殺すこ釈教知る
のんを付る拾ハ怪ハ之おまを殺る拾くお
をおくよ分るおよ死おとれと只およおくハ
ハ分袖こ射よ大楚活ハるいを葬する拾葬

手休するい疾記るんおるを何れよ或ハむ
（古）京のおを葬手ようきく件ハ挿象こ（罗）
孕を志る傷手を葬セトアラハさもあくむ
□ 一人ふゝ〜ゝ〜白乃采　佑
◆おの白人ハスギ大楚の大マテモ活て傷手を葬
ちモハ泊と天志独働く家の子を付ようり一人
跡雅の采ハ歌おこ乃て一人の手れ采
志ケ葬仕ヒ志て マア実拾ハ采ふ女
ス人ぢや陶志名志季ようり記て吐おこと
教読て皆く休する拾の逆付こ○（八月後）正
秀曰おをセ活と天人の活もて一人の
采ハ所こる分体ハ挿象こ正秀い直秀
おこ何れさる姿おきさてこ〜ハむ
□ おく（白）実月の記る天気合　り
◆おるこ志〜一人跡泣ハ後芦て後悔の件ト志
拾活を付ようおくよ実月の記る天気合

ヂャニトハ田苗ゑは寅月しるく記て殺文
するをけるゝ殺くは寒露のちとおそく
上よむ〳〵日和あれい眼病は荒働を
悪はと知ゝ〳〵系慢〳〵して又仕換〳〵今度
もに出て休はうと思ふ指之○ゼハはト改ヒ
吉自他の変はハ挿多之

□ 仙よかはむの遠ふ却字さ　芝

◆おのおゝは寅月の記るヤウニ宝ヲ又天乳
合はに河とゝ左は犯ゆれを分ようゝ仙よかはむの
連ふおをさトハけるを言ふ昆んと思うゝま
おをの秋い年れすとゝふ指之○西二百三ハ字
弟を日和のこのゆトゝるゝ〳〵作ゝ

□ 月彩はを昆を吸て又る　佑

◆おのゆ稼は恐ゝおをさは彩ゝ作ゝ又は月
は苦すふ指を分ようゝ〈烟ゆい却をは号用
の付て二ゆの陪和を寅い却むを連ふ字

昆地ようを地はるゝる作ト原体はゝ金二月
すめて俗衣おうき河飯山トおゝ

■ 兄の陪ゝはワセで鳥根ゝ手　り

◆おのゆ月彩は昆すふ〈高昆〉作ト又金二
用所〳〵指を分ゝ〳〵兄の陪はワセて鳥根
ふきトハそさゝ掃上きれんはめて乳拭
らんと手作苦は乳廻するる姓の乳拭
之○原出ふゝトアルハ茨字連ゆむふゝ次
左ゆれは苦後はけを

□ 手挿は娘をやゝて妖のさる　芝

◆おのゆ左家ハテ兄の陪はまはりワセゝ
鳥根茨河とゝ左は其家の号を分ようゝ
手払は娘をやゝて娘のさゝトハ三尼人も
おゝ娘い皆斤付号ゝは妖るとて大
ふ家作ようア内も陪ゝ手ハ字成さ
と鳥面の号する指之○西兄の陪の拭屋

よきんハ自他遠之

■ 糸宮の庇をさちで仕たる　佑

◆おのゝさゝ字多払よ姫出されいぬ〻ゝ
世とゝ人ちゝ丈坊の用を付さうコハ姫多ゝ
内ゆれい村の天去の拾ゆて常よ人の
強おゝ去ゝむ島子の友達抜筆さと
て支度形られい糸宮の庇をさちて仕たる
と陣のかゝよ伝形て常飾まゆと強と
さちよも嫁ゝゝてゝ厨すゝゝ付おゝそ
と世す拾ゝ

□ 花の屋ちゝじの方ら面白ん　り

◆おの糸宮の庇を仕たて出を体トゝ人ち
り形の時を付さうり花の屋ちゝしの方ら
面白んハもすや者型もちゝ比ゆまじる
須ゝの世ゝしちゝ是ゝゝ又むよりも一入面白し
とそ途型る拾ゝ◆おゝい糸宮の姿ゆき庇

ま家ゝそ丈人の姿をちてゝり○固お家てゆ
佑ハ性ゝ

□ ちゝ乃ひけゝる山陰の去　芝

◆おのむ山の林トよちゝじ楢る築庭脇てん
ゝ河トゝ人ち形要佑を付さうり方の引ふる
山陰の去トハ比辺えゝむゝ人坊ゝて姫
しれい他ゝちゝ引来てち屋を作て
行姫き地と家比ハ入仏供書ゆと姫
ゝる拾ゝ◆おの世ゝしい時ゆれい家ゝそ樫
の姿をちてゝり○固芋松おゝ昔ゆき
風色ハ後白或之

□ 久ゝよゝもゆゝく家ゝ池の庇　佑

◆おのちのヨリへ引ゝる山陰の去トゝ人ち
換ゝ拾を付さうゆゝよゝもゆゝくゆれる他の
庇トハちゝ拾ゝ時い山陰の他も教生梵形
ゆれい庇多ゝく集ゝをちゝ者のゆゝちゝ引て

海にはあまに宿する故に名恐て代〈ヨロ〉えぬらむ
とおもね教養の世を説きる詞也○なし・ハ
歌ならト改むべし
○一面ふりてあさゝ子　風　り
◆まる追々跡る色ト見ちぬ仲去の時候を附
ゆり△おくかるを引きとゑて見ひく詞を
付るは云教向く宿はおくかるを哀子人を
教向し□ち字よ最を指ふ宮ちト七八字は
増き声を憾し余情あらむ試むは先達一
体力也と再撰み法也と他よ比ふる所
も大よ劣らう箱存氣能ひて出棒ありは
抜之玉ふ隠れと滅後若よ移の信ま出るさ
るうみれはやむすの也　或人向日何を撫と
してや試箱の深意を表するなり　答曰
発揚よ峯る［八七子後］土丁の文よ「彼是三尺先
生きむと半強五芳きと申ぬ」トあるそ甚也

八九字〈ハル〉・礎の字〈アキ〉・磨〈コ〉・松か枝〈ヨ〉・夜の秋〈ナツ〉ト五字ます
る時は余二字並又磨字をぬく時は下稽
るゝとは字數同くなりはらして詠むと云事
穴平なれも「彼是三尺字出さむ」と不定まや
されたり仮令神代の昔とよとも其人の生
んを知て其云をもよらは其ちる趣を見るも
何のてきるもあらむ

稽古のよ浅さる云和歌松か枝ふ　佐木
◆稽古の一集の中本句も付句もなろ
のゆかきを見出し己ゝ集よ浅し歌を述ゐ
り松か枝は稽の好おみまらの月をもろと
よ示仮の姿く云和歌さるなろを眺くる
句なれは浅〈テサ〉るト作まり［于］浅さるれ云和
の松か枝と続く格〈ヨリ〉作云を交るらは皆
ありり［今之生］云住法し雑談集「云和の上よ我て

おのつからくるい稚う松ろのえ形りも 武蔵
を拾ひ行り

■ 日は宝くらきと稚多る岡 義

▲赤白まれの松ろヲ松ろのありきとえ丈丈
枯の体を付ろり只宝くられと稚ある丈ハ
丈丈くる松ろる加あ高き丈風を老の
きつく稚声絶て稚ある保山ハ松ろ拾ハ
姿を消れとう三ヶ月ハ食ろう 固松林道を氏
ハ少し○評注 右のお稚ろのハ足いもれて丈れの
松ろのそきき氏と丈んあ丈むう稚も丈ん
を吸ろる趣あり氏ハ分拾ろ

□ 水個る池の中ろうろ乃ろて 支考

▲赤白作ル日は宝くられと尾ハエテ稚ある
丈とえ丈丈枯の拾を付ろう水個る池の
中ろうユリ乃ろてハ山田の用水池の蔵水
の度れろる中を丈丈ハ付て鴨鳥ろる

冬ハ丈ろを付方ろう桃て丈宝宝を老ハ
拾ろ○固丈丈の宗氏ハ丈丈おろ

■ 伊藤什ヤ丈る宗を武く 旧蕉

▲赤白水個る池の中ろう焼へ上ル乃ろて氏
白と丈丈人の出る拾を付ろう老の什 変る
宗を丈て丈くハ他辺の義生仏ろうるを
丈個度刈て出る人を丈て義を丈丈子と
他の中ハ乃ろあるのとろふ拾ろ○固二白ろ
み氏ハ丈おろ

● 鶏ろあろと氏ハ 旧ハ 拾て言るの月 義

▲赤白丈てきて市ハ級く伊宗ハ丈丈多出を
付ろう〈ろとハ丈ハ丈ハ改ろ丈氏白老の什氏
行を付ろう宝ハ藤什氏 機の押蔵や
宝什ヤとを宗の次ハ切所角る女ハ丈丈
□獄行く娘拾ろ丈の月ハ記情する丈丈
○評注 伊ろも丈く只々言ると丈ろるのくしかく

少あきなを正月のたく中とて人共自常よ
りく拵するをおろく〳〵云出りし
かく成る人の世は多きを歎られ

□ 通り乃ちまきよ店ちる秋　考

▲おなじ郭うあれい蕎麦を喜ぶ　然
仲ト又は街乃の拵を分ろう面のみきよ店
ちるあきと八宅ちよ店明おてる云豆子
きいちとよられとく郭さ寺拵

□ 豆住豆一荷て売きる鶏の実　然

▲おなじ面のみきよ八ヤ店ちるヤウチ不案内ニ
月と又ちは又月の用を分ろう面ちく彩屋
店く後拵をれい店ちむと門ま出るおろく
拵鶏蕎の実ちき来て明るく多豆中侯
休みれい蕎豆ちとをを安く鶏実よ
一荷売きむ彩屋よ今此門さ寺拵ま
ま来ま拵れいあくとも夜と切上るの

義又拵く〳〵鶏の佐腐とてあきれあきあよ
つると豆よ級くも蕎の面の唱を寄よ級
ろう○西面ちきあ売きる八ち豆〳〵

■ 豆森の名を売り出るく　義

▲おなじ廿八日　豆住豆し地義市二人ヨリ二テ一
荷て売きる鶏の実ト又ち口〳〵声言ある拵を
分ろう氏地義豆い何門八尾の猪市〳〵ある
東の出格子ち豆ち慢の猪実の一荷店佐ろる
を左広去の殺来て佐ち蕎むと言る声よ豆
きる喰さよ格子の門よ豆ねヤ一主人豆
を見ア〳〵モウナ五〳〵ろいどこ豆ま止豆
い拵キ一と見くも時ろよ蕎ると〳〵モう出て
とろとセ一と対拵く記てアう喰の蕎と見
ま拵く〳〵豆住豆ト豆きをモト対一大ち市明
し何門ろろい情を実拵て鶏ま佐ろ了古
喰きまよ実一ち小南きろ○評注豆住豆

もよく奥も一夜寝する男の今さらは連し
て業に怠りしを比喩ねて恋ねも止る
ん事を勤めなし「遠」見付たり 此は情布
のるさきをぬらの趣向なし

□ 鶯が来て見るも七分にお語　孝

▲おのおのね七ひとする眠気悪て鳶わる件ト
「見立」云来を付たり鶯が来て見るも七分に
お語トハ言ふ尼角なる鶯の仍義に気候
仕削し秋又の困果されと吐きされは余支
多く附けたする趣向の「古」欠にてきく 此はよし

■ 中より行　状の吉左太　然

▲おのおの鶯が雕気に来てお語する件ト「見立」振
りの趣を付たり中より状の吉左太トハ
中より方行大名より大禄に召抱もとや
来る趣の吐なるむ

□ 朔日の日はどさくさや振廻き　為

▲おのおの中より鳴りて楽する所へ吉左太は告
来る件ト「見立」状見る趣を付たり中よりの鳴
楽するは船次の内之中より御大風の鳴れこの
おもく安難の状来りて神くを見るに勝るの
秋より所㊃をて、言ふ汐と出ぐるを見て候に
所㊄は何とくや振廻れてりめり其日も
安くも㊅風揖趣なりしと見合せ安難と共
出趣く△ツイタチハ月立なれは日字なる寸
此汲炭俵初芝「上」の候「雪の内」ノ句と同件
之再開なる所に趣向れきらえるなり「古」雑
船の鳴りなるおの便を見て其日は安も荒
るとなるん 此はよし ○「評註」我至お云て毎る人
にこそ安さる人々おもく中より吉左
太来る件 此は趣向なし

□ 学は羽織を失てたつぬる　孝

▲おのおの所々の日は何とくやら振廻き 二日ハイツコ

と掛する体ト又左に往るを考る用を付くう
郡二て と続くい初篇年の祝多き拾之は男
欣助るまい懐よ入三学和歌をいろこ落
しにむしなさ居のれよ出るとて捜又て夢
きとまよ長てとり四赤くを異又る拾く
◇之祝の茶後和歌を点千て肩よを懐よ
してあくるる家りまて は有よ彩くうり已
日之振と続く附懐入て出さう生ぬう見
ぬるもあむ点てり点て房くい失て
立よ去くし立るを去でい和こ少寸

■ 記さみまその比社擬勢纂　祐

◇おの白只今和歌を失て見る体ト又左拾一
を失ふ拾を付さう記さみ多きの比乃も
みくでハ已月郡法系四山の大令又和より
て旋まくよ涌く陶るとて茶和歌の拾一を
影板下て赤イ南考之とう引西し見れと又

えず後悔くるを其辺の樹木もて郡さみ
しと実くふ拾く因刃之よ弁当と失一往然
茶の侍ど変然りむ片 ○家図根柢字遠之

□ 山よ門ある形乃月　義

◇おの白記さみ片女人禁制地の根切て上又
立登山の拾と付さう山よ門ある形乃月
ハ已月九一日大海の已氣日よ言歴山神護ち
の祝深坊く坊ひと寂くる宮角よちよう
中門のあうより已方の宮を脱て立い墓
うむと釣坊くるまきたふ風も快く千
皮来ても住ゐき深よ法浄の灵坊うまと
戦ずる拾く ○序注もみくでの中よ門又ゐい
ちうまと月よ委寸件ハ接象く立用よ
山りせむや去り炭懐続修まい越白之匿
さる付ゐく白法を考てる又和考て
■ 初見畑孜人の今件まもう　考

▲ある山より門あるゝ村もの宅ト又左衛門の用を付さう初嵐畑の人数弘足ト小家
麦のたゝ所ゝ畑ゝ栗稗植ゝるを嵐より
伝セ其門より下男多く出弘足て麦
くりするを伝も大家ゝとゝ乃用の脚る拾
ゝ固麻柔皆てゝむ氏ハ元ゝ

□ 水除出ゝる候弘小鍬　弘

▲ある初嵐伯畑の人数他ゝ伝ニ弘足ゝる
伴ト又左衛候の用を付さう水除出ゝる候
のゝ足ハ候人の大鍬引するを入て畑ゝ
ゝる人の鍬引を伝て奥世むと発左我
伝ゝ拾也く拾ゝ大鍬を地方ひく時
いゝ所くて次ゝ奥ゝ入ゝ入れ必地人の
伝を拾ゝ奥ゝ入ゝ伝候のゝ
固鍬程ゝ弘足ゝ奥ゝを考あゝ

□ 入て通る紀三井いむの候かり　羽

▲ある小鍬の水除出ゝる拾ゝ足ゝ
又左衛の用を付さう入て通る紀三井
むの候ゝ入ハ候もむさく拾生の風を
を脚ゝ人の時ゝの設おゝ○訳注お宝
一氏固与太尊氏ハ氷之

□ 荷拾一人ゝいとゝ永き日　考

▲ある紀三井のむ出ゝ荷ゝ来ゝ出る伴
ト又左ゝ通の拾を付さう荷拾一人ゝいとゝ
永き日ハ博下ゝ荷代の方ゝ荷の脚ゝ
ゝ入ゝ荷の子を連ゝ入ゝ時ハ出りさう
りまをひく時ハ又百ゝ出さう一人まう
ハ子の荷拾する者ゝ出ゝ弘ぢ
て紀三井ゝ拾ゝて出る拾ゝ　弘

□ 古ち風の又西ゝ北ゝ　弘

▲ある荷拾人の荷上ゝ永日を費す伴ト又左
整舟を付さう古ち風の又西ゝ入ゝ

トハ在人多き間ハ舟長て水主ハ高上さを
るハ船客の狂風ハ彼方ハさん舟ふゝを
舟者一人まハ困て仲仕あきけんふとと
ゆく船之事風あるあゝかく船り○吉仲
用の変ハ付れ又ぬあゝ

□ 我身て孫を大事かゝる　箇

▲おゐ狂風ハ船て主熱往来する病ト又金貴
用を付くり我身て孫を大事ゝゝトハ
医陽之事多ハて按業調合させ
ぞゝゝ日和ぢやと申合する船ゝ固宮ゝ
ぬ梅梅ハれよ〜○浮注分の上を保ゝ
ゝ云風ふゝ加ハ方ゝや風邪ハ起き
せ〜きゝと悩む船ハ孫達風引ゝ
引ぬゝ考ぬ位ていい孫ても言葉ふむ

■ 後呼の内義い今度度数ゝ　考

固ゐ狂ハれ〜ハ我身ハ孫を大事ゝゝ

河と又吉▲老の後ゝ吉ゝる船を付くり後呼の
内女ハ今度度数ゝ〜ハ次第ゝ〜ハ差き
女房ハゝゝゝゝ病も新ゝ常住孫身
で孫又て某ハひせゝゝゝ〜ゝ身ゝの又
ゝ吉いゝゝぬおと張云する船

□ 喧嘩のさゝもむさとせられぬ　箇

▲おゐ後呼の内女ハ今度度数ゝ来レ給
ミガワルイハ河と又吉次の河を付くり喧
嘩のさゝもむさとせられぬハ是をとそ
速ふそアノ男ハ〜を言ふきれい喧むい
えゝりさゝもゝ〜ぬ時用ハせと矢
ハ喧嘩を強き山伏の事正ゝむ

■ 大切ゝ日ハ二日ある者の後　箇

▲おゐ喧嘩のひんきもむさとせられぬト
又言〜ゝる体ト又吉又由を付くり大切
ゝ日ハ二日ある者の後ト八主釈の号日語

こちら門おそて怪むする所へ通をくれと云
へくれきれに行ひんきかて我も出発むし
とて又命〳〵ゝて門内へ入る者おの指〳〵おの
い怪むの時あれい客そて怪むの次あをを
ゝり ○固怪むるを訳の妻あり此浮世又
母の家日之者の法をて居む又母を去
ゝ法此も居挿系之

□ 雪搔今〳〵中乃尼道 考

◆右白二日甘祖所と申奥之の日を大切ゝ
和ゝ門法宗の法ゝ〳〵と又ち伝者の志を
付ゝり雪搔分〳〵中の尼乃ゝハ条指乃
男之助ゝむと乃屋モ〳〵門おの人乃家
和ゝ殊勝之コハ十月ゝ極月ゝ月次法
法之 ○固表月の法会此常寺二日ある
甘七ゝ五拾ゝ又ゝ

■ 来る夜の客を い居出家尼 弦

◆右白雪搔分尼乃をひゝ〳〵別ちこゝ
あるく俗ゝ又ち百人を付ゝり来る夜の客
をを居出家尼ゝハ客の時者ゝ客をゝ
を上る雪和をゝりをゝりをゝりをゝも肩
すかめゝる坊之天忘のまゝ和ゝきゝ指之
○固訳の指此ハ一説之

□ 奥の世話を近ゝ社作 義

固右白出家ゝ〳〵ゝ客をゝて来る狗友ゝ
上京の俗ゝ又ち百人を付ゝり奥の世話
いゝゝの他ゝ奥様冷ゝ守ゝ達ゝ
出家尼ゝ〳〵ゝ上京する口今ゝ中ゝ
九ゝ付ゝ〳〵ゝと怪ゝ指之○浮世彼ゝ怪ゝ
ゝゝのゝ中ゝ居此ハ狗之ゝ〳〵ゝ
る人の怪ゝ多ゝ居ゝ中ゝ

■ 何ゝも者のあき月入て 考

◆右白奥様ゝの世ゝ怪ゝ又ち百人付乃

用を付さうにはよりも者のあき月又てよ
浦辺より泊する振客に其を作の上より大俣より
てあられい今ゝゝ客こと拵より来る引今ふ
あゝゝ引ゝ拵の性する拵に固にのあきと
やゝ程あゝむかよう

□ 赤鯨形を産形正面　秘

◆おの白者クヒヲトヤニ用よりもはるかのあき月
又て出と又出丈横の笑会を付さう赤
鯨又を産の正面トハ下戸の月又客の新
主赤より弱くるを又て佐ゝ多い特の尾て
鯨又ちやはいちちら欣て又すれいあん者
を特出て寄れまと産の鯨又拵きー事
者あしを笑ふ拵ゝ○固にの産の挿形ハ
赤字のんと云ゝぬあゝ

■ 宮ゝぬ娘のんえ去八兎　箱

固おの白正面ヨコハ仮のむうと新のさい向より鯨

又を入する件ト又ち◆性根産病人を付さう
宮ゝぬ娘のんえ法トハ只そめゝ意衣の思
ふ拵乱と等を衛より号りをさめ正えある
ら試むと鯨又の体柱を正面ニ立てしハ
仮のむそと同より双抱人のん配を付さう○
産法只乱娘の強ゝんえ法ゝるら奥付表
より拵あて産の鯨又より向てゝむかハ掛象ゝ
鯨又い乱んの茎ゝす

■ 森行乃とまるひさ方社麦　考

◆おの白膀胱乱ニテ宮ゝぬ娘のんえ法ハ
白と又ち丈宮件を付さう森行のとまる
ひさ方の麦トハ拵い産ゝ扉ひき注行
て乱者モを計業の功て鯨行ゝ明方い
行やゝちやゝ麦又るひきよ人皆産法
拵ゝ○固強乱ゝ麦ハ又孫速固ちれも
意ハ斤産ゝ

■ 名月をまつりと記す松の風　能
▲此句ハ夜見て旅行致せる侍ト見えたり是を
見守ることを待つらり名月をまつりと記す
松の風トハ能嵐に彼の松風てあらえて
名月の句名月を詠する夜旅にて記れるも
昔の名月の景に目を見て士の栄達居之
□ 大工をろの奥に明る　能
固此句名月迄て作れる大家トえたり▲見
込てる所を待つより大工をの奥に明ゆるトハ
年中人をする内わてむト見やる所之
■ 采擔もろふいよしとて帰る也　孝
▲此句奥の事常て大工をろと人の見る作ト
見たり此事を待つより采擔もろふいよしとて
帰るやトハ門口より采擔よろしと宿ている
又「お有よろし」と何てれ申くをえてろくす
限て采擔にて作者なとら皆に聞られ

来るハ何でと言ふにハ、ア奥の事るを大工をと明
さのちアレやだくの小細工だやに当時の人ハ
テモ上手よんとおもよふ所之　○固
此語に用ありト所に新すにハよし一ヲ此文
に限るに向と見此句を居て明し居之
■ かゝ勿で市の中を押わく　能
▲此句采擔も町人モろふいコト手よしとて帰る之
此句と見え遣勝負に勝る所を待つよりかく
勿で市の中を押わけ町くら聚まで社家
衆で押合の跡よる所之押携しくの次子
いんぢよしと云ツゝ来月勝して帰るをアえて
また果らと門に出て宮の方ヘ入るまゝ末は
烟立て押わけ宮中の所く○評注させる
人に此ハ此所を言うで此采擔の者市を
帰る所と見え所之まそい此句の字
よりも字さるまゝに申えす

□ はあさり孫生いむのけもあて　拾
あるを漢神倉する陵あるを時者と云時依
矣多る市柄を分ちり はあさり孫生いむ乃
けもあくてよ我まちむいまくはは布子云
るよは辺いむい二月まちりをてかる源拾を
れ口と云むの人の陵あて絡く拾く ○天
云云の市くはあくうともられて分くる市の
拾る大和の上市は八一拾くはあさりと拾く
るに云陵のおを守するあの仮あるを
■ 名尼の油乃まくぬるあ夫　考
あるはあさり云云は孫生いむのけもあくては
祠と云云小云の拾を分ちり名の油のまく拾ぬ
妻とはコハ云名の人地ちすと地云と前ち拾
むいは五月こやさくらむ固金云の拾拾むま
逆逆の変は云ちく〳〵はあ集中文二

夜孔拾や崩て明〳〵次〳〵拾　前
▲次あよ侵て盛云ちる孔拾れを原ちく高
し人の宮崩ちる孔拾明人去作も住云〳〵
人と夜のおち金件〳〵云云ちる地云と夜
のおやおモ人云モ菓モ崩てはんくコハ宮老
孔拾ある菓水の源を云ちくれむ○固崩る
と云次あの形云云れと菓云きおの拾を拾
る双宮の作は地ちくコハ雑崩ちくてく
ちく菓是ちあ守源きおく因次おを
変次は喰変
■ 雲をはりと蓮の拾先　曲翠
▲布る夜の明まる次おの地云まあ〳〵ち申
の件と云云蓮守宮を分ちり崩いちり
と菓の拾先は地の菓守むと未明ち
拾ま孔て人孔を孔ちる宮プウ〳〵開
ちる云又む崩て平ちよ崩を八ち〳〵拾

より多く移す光るる乳い発ふ生て快く
云生悲生乃る歌もかくやと撲身うてた
おきちよ推く実てる草の俣ふ蔵ー稼先の船
ゑ△甚い院ふ屏き多度周や氏三日強て家
るおこ高い和も〜苔ー固花ー素ト芳ま
合てう ○固他の祇行汐お兵挿氣こ

□ 多ういつぞの祖ふ吉るを入て 孔雀

▲おの白草の高稼先ふちるい多秩き芋尾ト
又立家美ふ行指を付てう多いつそのの
祖ふ吉るを入てトハホフ法む強の声を強
ー尾立の岡立ふ吉ちの独開く吉〜
佗て稼先ようあてうの楊脛て家と陪
ふ候ちてりとふ芋船〜○固あてうの木立
ふてけ家美の件兵並おこ

□ 古き草篇ふ及故押む 班強

▲おの白多いつその祖ふ吉るを入て。ヲレトヲ白

河と又ち立吉てる用を付てう古き度ふ及加
押ひむトハ元部てる多ちの詠草あるを外義
の傍おるかそこれて押込ひまて多ちも
吉るを入さやむとおずーてる文人の指こ固
河吉ふ新ー東三方の詠草を仕ち子兵ふ

□ 月新の吉ちを吉る雨ての色 支考

▲おの白又加行付ふい唐紙汐度ト又ち立を家
の指を付てう月今の吉ちを吉る雨ての色
トハ夕方おち〜仕立稼ふ掃出て宮お脛
ア〜ん附汐お附ーケ付挿指おの明ての
口れい弟ふおて〜すと広ある指こ固ー

■ 仕まうて汐を合る多早 義

▲おの白夕月のやと又て明ての日和吉する侍又
ち立又日多ーの用を付てう仕まうて汐を
ぐる多る早トハ猴ふ庸固おを吉てる
も交てうむモウ広汐ふ吉てでい立てけを

コレヤ明くい佐〻〻しと性す指く○固夕ゑるの
仲ハ[序注]乃中の仲ハ一段く

□ 弦を粉物形刑（遠刑）ー　翠

▲ゑる仕ロて徐ゑるハ俗ロふさ仕合ト又ち匠
丈用を付〻り弦を粉物の刑（遠刑）ー
ハ悔ト酢を翌〻〻付ゆるおう〻毋屑弦
出て荒ロてるる向〻来る女中のアレ遠
ゑまよ助ゑとおるを雑ゑ〻粉物のお
（匠迹）れい因代とて二ゑ〻れ〻ゑ〻ゑ
ゲ毎日あれ〻と共ふ指く○固粉物又お
ゑ翌ゑて来てあそて指ハ換ゑく

■ 山〻〻又ゑ久を出て出す　言

▲ゑる薄てお一弦を粉物の刑（遠き）ー仲ト
又ち匠ちこのおゑる指を付〻り山〻〻又ゑ
久を出て出寸ハ又ち匠ー又れより弦ゑ
丈傍ゑ弦ねて佐〻れい遠迹ーて又かき寸

指く〻〻ゑい吉佐あれい宴ゑて弦の姿を左
〻〻○固丈あ〻〻〻運指ー仲ハ出ー〻ん
ゑ〻ち〻て為く出寸ハ口ハ只今かき上る指く

■ 服裾ゑる麺棡ゑ狭む大手鋼　弦

▲ゑる山〻〻一休ーていさと舟出寸仲又ち匠弁
弟き〻ー指を付〻り服裾ゑるめんけゑまさ
む裾鋼ハ丈辺の宋切て約茅箍ゑ素を焚
服仕ロてめんけを小和引（大手カマノハタル形）
ゑて〻大おをさむ指く

■ 七ち〻て二丈を去さる照ふ　考

▲ゑる麺棡の鋼抜て大ち〻ん仲ト又ち匠丈人物
の指を付〻り面棡物せ〻ハ丈日物の侯人
ゑいき素の〻焚付し大ち〻ん〻ゑ大口去あ
りて一向佐ハ〻ハゑと空脆め及理で考弟く
ワ未ハ〻ゑ〻ゑむコレヤ俗挿指ゑれい夕乃
ち〻ゑい羽上ゑと〻ゑ侍ゑかり舟物宴ゑ

ものてハアア舟人いまもて四度の工夫してをるとゝ拾く〈考九月おもくい度八度い四
と固陳人ハハし因あり

□ おきうの中嘉ハ詠く格社嘉　翁

▲おきうきてうまさ〳〵る四度ハ自然と人ちに丈人と行さ〳〵きて工夫〳〵と天文考れおく
時年の老い拾夕新ハ　やち柄の中乃拾ちい歳世ら嘉ハ詠ましるらふト紀ものそ嘉れ〳〵分でさ
るもも志ゆ文育考い拾ち〳〵と古ハ
ものゆ拾め〳〵我ものい世〳〵の撰集
も出て系図正き考と後ハ〳〵お
後ら拾く圏九ハ

■ 持佛乃歳千夕日拾アむ　翁

▲おの分の上を嘉ハ詠〳〵ハ拾ち
社彫悦する仲ハ人ち述情を分〳〵お

仏の白く夕日さしむハ只一万の嘉小ハ〳〵
ものるお仏（横日さすハ拾ものるを見候ハ伝ものう
あの大切ものを見ハ詠〳〵分を加て仮草ハ口さ
切所白しと嘉ハ詠〳〵分を加て仮草ハ口さ
と者て僅ものを草ハ戸ハものゆ求ものと考を
拾ものを人ものを人ものを〳〵　○因四度の工夫
ものを宮ハの通回ものを人ものを拾の中嘉を文
夕日ものを拾の方角を宮通回の木像と
分〳〵ハ嘉ハ詠〳〵ものを

□ 平畦ハ菜を苅ち一萱ハ　考

▲おの白ハの拾仏〳〵夕日さハと名く仲ハ人
ち述ものを拾を分〳〵ハ手畦ハ菜を苅ち
し萱ハハ田舎ハ碑述氏辺ハ向乃
家くりしと者ハ同さ出ものハ乃嘉き
畑中ハ出てさ〳〵ハ碑述ものりきさん
苛て乃郎ものを拾く。氏白坊を表ハちものハ

迂生をし宮の□郎生る乃の苔菜の芽を
ト指と用を作く怪を守るも

■ 秋風わ〳〵る門の居風ろ　拙

▲和句乃ふく菜苔ふ芽と畑の辺を歩く体
ト又古人者の用を行う秋風渡る門乃
苔ふろトハふろ芽の人とお畑のゆう元
て作和の扶を作る所を活る格心

■ ろ引で旅初る月の新　言

▲和句門の苔ふろ町を入辺る家ト又古言
宿を行う ろ引で旅初る月の新トハ
牧こう勢く寄ちる日ふ来ることもし
る乃中の宿所の格く名月おおれい旅初
る月の新作くう ○固ろ市ハて字を
使て門ふて加こ使ふ百少こ

■ 庭作て庭ち〳〵えの人ゆ　翁

▲和句ろ引でゆえ月ろをく旅を作

ト又古人を行う庭作て行〳〵えの人を
ゆトハ庭作ろ行を又宿人ふる男ろを
笑を比孫扶て年京通の格笑扶てろ
行れい年云のろ人ゆ〳〵えを扶て
て嗚〳〵年人ゆ改ふを月ゆ左くて考ろ
扶く ○翁ゆ つぎ〳〵トハ出扶く八九乃乃老
も書つぎト年あ宿ゆ古ふ固宿心よ
り欠庭や〳〵南を表ハ旅ゆの又庭く

■ 隣子母扶今ゆのむゆ形ろ　翁

▲和句庭作て行〳〵えの人ゆ扶ろ人ゆ扶く体ト又
古人其由を行ろう えの人とふ今の人ふ妻
ふる風狂人ふ年ふ扶ゆ者の地又むとわふる
ゆ坊の地ゆ隣ゆ隣ゆふるゆ扶ゆて十機も年
ろ乱一庭弱き旅ゆゆ似ぬ大会とトろる
ゆ連の人ゆちく今の人ゆ家神とトセろ
コハえ庭作ゆふろる隣合の出歯肋とふ

人々とゆきかいて注各出をあ拾くとゆちろ
拾の逆付く固れ

□ 正月おの乃袴も拾さて　言

▲おの白候好の子今年のはをむよ厚ては
河と又左三吉振旦を付うう正月おの袴も
拾さ守ハ彩よ付りるるのおゑ拾りよ
候ひれい年向て人く彩るさしてマテ長
の彩よ袴も拾さ守ハ河ハ又袴ても三方といひ
て袴よやぬ拾きるを答る拾之〈年む
ハ年姫のるくを字をやくるんくて拾よ正月
ハ□係て付うう固年と拾ハ

□ 表風よ著袴の猿ひる守也　拾

▲おの白正月おの袴も上サモ拾さ守ハ河ハ又
左三対注の拾を付うう表風よ著袴の猿
ひる守也ハ年姫よ株梁の内りて鳥ふ
く細工袴よ裾引上袴て拾図板出するを

尺て表風たてい河人猿と又也ある袴ハ
おのるをかく彩ら付守ていれ彩ちれまんと
戦ん寸る拾之○固大ユよ彩寸ハ主客連之

■ 義く村くぬくく村くぬる祝乃　考

▲おの表風年和て著袴する伴ハ又左
サ袴の拾を付うう義く村くぬる祝乃
ハ川原義の切方ある乃著袴よ村役人
の左並て浮文寸る拾之

■ 喰年ぬ年も男もに利て　義

▲おの数係く村くぬる祝乃通りカヘル
伴と昴休ハ又左三年おを付うう氏義信の屋
乃之年ま数年来るおく伝信の字袴姫
るるるちく喰年ぬ効上あれい関ハ寸
云義袴ハ田と娘もおるる朱て年ひ孫よ
姫ちる寸年家くもよる寸ま数連て祝
乃ようゆる拾の逆付之○固表く表ハ袴

此ハ佐口之[注]注百姓の祖先なる仲兵衛
おこ者云てハ利て口一字こす

□ 何せ社所ハ山伏なる　翠

◆おなじ喰ひぬ陸二絮も男もアリ一門ノ人ニハ口
利て口問とえ左口きく故を分さう何その時ハ
山伏なるトハぬか人こちやあんかるて
感するよりハ石姓古る方ゝまれとも全
仲抜ちんゝ新さるとて後ノ祖之固大墓
糸辺の民家ハ此けさる老屋」ノリ

● 笹芭を梅ハ分くる狭　宗

◆おなじ限マヨケノ戻ヨエ入テ何その時ハ山伏なか
る口問とえ左口其姿を分さう笹芭を梅ハ
分る狭家ハ口布抜の上ハ奥ヲ黄て
なるワあ人ふるすちんゝ何そ猪まハ
きみハ山伏なるとなる祖之

□ 厳おそてる知月世の来　義

◆おなじ梅ハ分くる芭の中ヲ月きく仲ト之左
其問を分さう厳後まる知月世の来ハり
連ハ人の一人ハ松草とふをイヤく来知
月みきハ草ハ生寺とひ一人ハ厳とふを
すや厳ハ此抜ハ後ちんゝうとひて浮
多一匹てりるるみ月の祖之○[注]左ちこ
のりきハ並おこ

□ お宿と後先ちこ矢木の町　考

◆おなじ知月みの後き厳くもセ口ハ言ハ之
左振のを連を分さう お宿と後先ちこ
八木の町ハ大和口の乱之ハ之の右人を
生るとちやきちんゝ後き厳くもちこお
おなじ方のもさちこと同前セ口後の連と呼す
抜くおいみ世厳みるを食ハ抜する加ち
矢木の町の宿ト□係て世来ノ問を後ハ
ちり○固厳茂る年ハ乱ヲ乱ちて乱ハ

拵為べく正月の厳蕚をみる

□ 陽乃日和そ一寸計乳を　絃

▲おなじ日お病と一同よちゑ守医先生さう伴ト又
医又熱気を付さう陽の日和よ寸の乳を
トハお病の同乃ちひとりむとりつをおきき出志
と疑て寸の時てもちゑ保られい帯むと先く
ちつ乃ゑ実い乃ちの大金お放く〳〵実よ
時くの寸を乳出そく連ちてそたつくりき
白作るも多くも居ゆ氏金居よんゆあり
○固ちゑ寸ハ性ロこ

■ 欣人ゑちやぬ図の引き図　翠

▲おなじ日を見て陽よ寸を乳出て伴ト又寸貴
用気を付さう欣人ゑちやぬ図の引き図
よちと試てコレヤ要ゑ図お入守の栓引
抜の侵ぢや図い先ちそとそそで明ふ
寸いよろむと身用気する拵こ固よ

□ 気船孔分を舟へ移くる　う

▲おなじ日を見て連欣人ゑちやぬ図の引き図
一ロ河と又ちと又抜の用を付さう ゑちやぬ
い伊舟図ゆれいコ大図ちゑる船又おの
人こ世の船中間この居図よ陀られいふ
い時ちよ引抜図元ちて宴一船りの
支度洞く又陽も氏舟よのれいき気こ
船量て出ろ拵こ○固侯伏又ハ渉く

□ 対分一文銀の束る月の巻　義

▲おなじ舟伊い寸の巻こ移て上る伴ト又
ちと拵ち一拵を付さう対分一文銀の束
ちる月の巻ハ拵ちの使ゆむいろこ
おち一と見てもイヤちろとくむろりて
先方と陽きられと縁の傷脚乃ちゑ寸を
る図ちよ連ふまーと舟人の出守拵こ合白拵
ゆれい寸ちよゆ寸 ㊀ 図ち一対の付ちる拵ゆれ

ともに夫向のあるて対を分て不故あるきを
しるせて引り○固拍子奇なるの色と色と
又て月又の仲に[注]向なる帳面する客の
舟よりの人に対て外の使いりしとする付丞又
より実入快来るる拍にも拍子あり
■ おそろくあくるあくるの上揚屋　考
◆おなじ対付一文字の来る月の書ノインカミキ
ノニに河と又ちに取次の人を分うそろくあ
りくるの上揚屋に三日夜のあや衣空へ
ぞくれとちるあひやくあて夜紙そろうと
屏きも紙引て静く出るをて中廊方の
女い病志のあくく拍子生あるん見えちゃに
多の書合対応きを使の行作るも并くす
とそやる拍子○固手奪に新又換乃拍回
速又[注]京に非之事故の他人い今も拍やくの
ときの女の名目をうをと京ト仁乃速てる多多

一見に夫門の余喫之
□ 出張所なる日条の角北河原町　茲
◆おなじそろくあくるくるくるの市おなる仲と又
ちに夫坊の拍を分て不むこつる日条の角乃
河原町に義人の拍伝を生くる女中きの
紙屋清の海さ茲やの門ようて小僕と
むりて赤さも局の使茲歴めむとおする拍之
■ 言葉をあくるくる表一冨　翠
◆おなじ来ノ西に河むこつる日条の角めの河原町
ト表ル河と又ちに送おを分うこるを上る
表一冨に伝後表之一丁東の言七門より
舟の小丁拍子おて拍やる拍之○固二百三
に八並おし
□ 今の乃よ残を又医す揚の上　言
◆おなじ言も揚の上より揚屋の拍れするを
又高一仲に又ちに夫由乃を分うう今の乃

る後を又臣す橋の上ハうりもちゐる
ゆ郡の供侍ハ皆柔橋を左くりめけ一を
田舎出の丁雅のおろく候て近面く拾
こ固舟又るろよ侍〜供ハハし

■ 大きゑ侍のどんよ丈面ら　拾

◆ある今のろよ侍を又侍ちたきれト
又ち侍をろく面るハ戸あつま橋の拾を付さ
り大きゑ侍のとんよ丈面るトハ侍をちの入
およ面を多くり列の武期もあまぎる書次
る橋戒面く侍の侍も侍かく侍のちも
侍ハる拾〜○固又考ゑ純面と付さり
ハハ拾ちと

■ 盛ある柔も扉押よセく　考

◆ある大きゑ侍ハ日枝山清水の侍つく
侍ト又ち三山集る拾を付さり生ある也も
扉押よセて六月も多も三千坊の呂ま

徒を集め天台の法灯を挑て仏法興隆
をそうるゆ弦る面ゆき拾　隆ゑハ也ま隆く
時くろよ生ゑ殿のそく期る人の扉押よセて
あくりもきと無ある拾〜固初ゑの山ハハし

■ 腰を通し　考棚乃下　言

◆ある盛ある也も門ノ扉押よセて人三千
ゆへモ余タル侍と又ち也又の旅を付さり
腰を通し　考都のトハ期ゑ面の拾橋く
門内門外のむれ面いるも又ゑ考都のト
の柔店も床ル臣侍〜侍面旅き拾〜
○固来茶ちとけ面ゆき期あ井の考乃静さ
ハハ来茶つ〜ト丈侍仏を積〜ト又る〜拾〜
又あ井ゑ人ちの乃ゑ扉も面〜〈さて茶ち
集中考人の出来あく

猿楽　能　殺

・ソク

	ム	○	●	∩	⊃	▲	◀	▯	□	▮	■	
方二			一	尺	一	六	二	六	六	三	六	○一
方三	一	二	三	一	一	六		六	七	尺	尺	○一
方尺		二	二	六	一	六		九	三	六		
方二			一	三		七	二	八	七	尺	三	
方一				一		十	一	六	九	二	六	○昂一一

尺匕三く尺く、五、
八九日差字字分むろ夜秋

○七部秘法あ
一冬日（方一） 五色 昂体五
一夏日 三色 同 尺
一精を乃 尺色 同 尺
太三集色捨て上品の精撰之
一ひさ去（方二） 五色 昂 五
方一方五の色ハ上品方二方一方三の色交
次方尺 此色中品也
一統精（方三） 五色 昂 一
方五の色ハ上品方一方尺交次方二の
色中品ニて方三の色大ニ劣レり差
此一色を除きて類ニ用ゆるむ
一炭俵（方尺） 八色 昂 二
方三方五方七方八の尺色勝れと類の
次の色佳く方一の色中品方二方尺方六
此三色ハ大ニ劣レり

一方五　あくの　十老　昂　一

方五方七の二老及平て務れも
宸儀の中不佐く方に方六方八の三老
及沢て方九の老宸儀の下不佐ゆ
む方一方二方三方十の四老又一隅も考
ゆ〻む仮令ば四老を除てもすみ儀
孔下横ゆ〻むら

一郭歩　昂　二

一日百句ゆ〻ゑは多の稚拙まて
乃手ゆ〻ゆ〻も舎釈も多ゆれと新より
延〻ゆ〻ゆ一歩まるてゆ

古東方の仮名〻とゆ〻も皆こゆ毋掘ま
但ゆむ〻ゑて句〻の省を截ゆもゆわゆ
きいゆゆ序は後ひおゆゆ学者ゆ叙別は
ゆて社中の句を求〻ゆて私の好恣寄
ゆむ古き評云の故ゆ〻ゆゆ

七部波安忘録七附録

○延宝五丁巳初懐氏帝

百韻　両吟　曲齋　注

発梅は咲も初春を惜ぶ　義

▲梅は咲ゆ〻の初春を惜ぶ　義　斜は秋の
の数寄稚ゆて牛も〻ゆも初春を惜ぶ
ゆふと良無〻て初春の祝を述て〻〻〻
不易の去行竹原りの去行を広広をもて
来り所に句不易の竹く拙句は不易原
り民八逝向の元方をひ去行を広句化
の体ゆ〻て梅は号も牛も皆不易の元合
おく牛も初春とゆて号を使ゆる去体の
作句あゆ人に先ひ佳ゆ人ゆ号は
■　ゆ〻て牛は人ゆ孔　化　伝来

▲牛句二月の梅盛ゆ比の代拙生の長無ト
又ゆ〻も字の余情を付ゆ〻ゆ〻て牛は人

万の作ハ武比性も初まるを専に生も初
まるを時ぐむ事とふ拾く[原]考ニツんを
種とて万れ云ふとそ専ける譬をよ
く学ぶ水ます性の声をきゐ生と生る
お何れも寄を詠さうる比後を含てまて
や人万の作ど云を外も初まるを時でハ竹ぬ
拾よひ旦耕作ー文作ートを学もてう〳〵必比
本るのんをまゞし探を所印得ょ才拾ト呉く
りてや武所ようかくる格定てうを戸武老
を正月の始と云出りるさる人伝学き所く
□ 寄る孔経てまれる世中よ 寄
▲寄る作字徒おの性を人て人万の作比初と
又左他辺の胞を分てう寄る酒所
るよの中よハうき時ーよるの宗明て他を
胞の性の面よ水比後を見出る考れて
性をあるとお学する拾の逆付く

■ 孤こて交の世がれて下萌 義
▲寄る寄るの経てる寄やきてる世中よ云て
房る作と又左交情の後笑を付てう孤こて
交の世人の下前ハるるるの丹古房て中
よう世笑てる上をすゞしと南見こて学
花寄のアし辺い条寄孤こあ〳〵日寄
寄付寄るの作花の形程の房りる
よの中よて孔の利ぬ時さ人よ孤こと
て考てるん〳〵と世笑む交の世人の下前比
て寄の秀るして房る拾く〳〵日の中よ姿
をちて法い祖義ろて仏頂祖時よ寄て
後多達の上交て宗よ朱拾てう七アの
中よも武作多れと毛享保後の逆去達を
下さてる祖時の比拾よう入てさる前く
■ 拾作を差ふ乃ちて衣 、
▲寄る世人の下前よ孤こて孤ると作ト上

七字の准云ヲ按ずるに此の指を付
う指拳を表字の指夜トハ小指拳おり
て孤をそすを表字女中の指手をもむと
ろ押ゆるは男女にて〜くするなり
まるて女の陰をソレトは強は又夜て
地地を孤をそ和すをるを（イセ物語）考る此の表
字の指夜表の孔乱限考れを古考
孔食河まて字陰指〜暴おを佗〜る
風流〜〜無あむと夜り指拳の長考
媒と乗る人男のみ指指臣かの臣と說
する金陰陽秘の中は人心を考〜考む

■ むう〜 陰孔男あり八座　素

表白表表の陽時表て男〜〜指拳する拳ト
又左丈指の長無を付ら〜り昔陰の男孔
り〜トハ蒲拳陰の座男の行出て内する
を人てイセお語一陰〜の発陽は〜〜

男みえ〜は河の表白もて今働く男
の男ゆをおそやす指〜

■ 胚のひ〜付初る去の月　素

金の白芽より今は日毎〜東より西へ変孔
働足る月の桂男トは左丈形宮を付〜
り胚の宮初る去の月トハ表月比乃
二月〜は去夫も休はるる〜孤出る加
まあ〜り切むと尺すきむ指〜芽男う
桂男トは〜加は□月トは保すて〜守〜
は白法ち孔集中も多〜又准付の後
を孔おとるるも敗は宮〜る法〜宮は
茂林と蓬門とのおをいそむ孔法林の
風流准河の寓云は又准云を考〜れて
河の上のし孔月白多〜蓬門去白寓云
ある時は次は極て姿あるおは又考〜中白
の中僅二三字の准云と〜考も表ふ

弓張ちきき君と正風とあるべきを延宝の
ちゝめ翁かゝる句法を宋鈴して俳諧を完
めつるを今の今とも思ふさる人のこ
ゝるハアラジ乃ち不伝の弓あるうも

□ 仕舞たてゝ西くあゝ引の山　翁

◆翁白脇の冥初ゝる二イトサムキ世の月に河
とゝ人生歩り社雑文を付ゝ乃ち立て西く
ゝ引の山ゝ西く焦失の脇を
いゝ三注庭る月ゝ君れ端ゝちんをひくら
ちゝ乃ち西くをいゝ注ゝ庭ゝむ俗男の力
さゝ子ゝ乃ちやる拾ゝ◆あゝ哭ハ山の孤也
くひゝんあるをちんをめるゝ君ゝるハ世
君ゝ世ゝも翁の脇に准云を引あゝう
芭俳の君ハ准付ゝ一ゝ美油彩ゝてゝる
も忽淡林の君注とあゝむ

■ 五寸注ゝの届さる寿孔乃　幸

◆翁白ゝ小ホウカナリ乃ち立て西くあゝ哭の山に
河と又ち寿人のさむけを付ゝう五寸注ゝ
の届さる寿孔乃ハ寿乃ハ乃ち脇ちゝさ
りと乃ち所に向ゝる山出来を登る時
も又頂乃て孔ゝ天ちゝるゝの庭す百尺
の半孔ゝ一ゝを進る所ゝ面ゝおもされハゝ庭
んおもたゝるゝくゝ世乃を乃ち西くゝを述さ
り◆河ちゝるゝ五寸西くゝゝ乃ト作ゝるハ河の
中の姿ちゝ宮ハ翁の足引に准云を実
孔拾河ト姿ちてゝ

□ 一かんあまり位ゝ乃松　翁

◆翁白拾ゝる人ゝ寿の乃ゝ寿注庭寸
に河と又ち丈拾柄を付ゝう一かん余位吉
の松ト乃位吉の寿人注ゝ吉の松をま
ゝ拾又ちとれ注庭ゝ又ちれとゝ
を向ゝ旦又ちゝ寸注庭ゝさり君ゝ孔

の乃もやけみれい住吉の神行て久人よ
等ぬ〳〵と哉りよ□の逆付し〳〵五すゑの姿
を空て考りよ毎の屆ぬ広方を考よ祖こう
コハおゐを考よりよ問トアる事方し元草
体の考いアス左邊向よ歩考おき時ハ白作
よ曲節を用ゑそのぬ草孤よ序破
ゑ人の考思あり宮よ西〳〵これを又
るの次を以て伝む今宮よ月をとむへ
きゐ知矢ハか〳〵部信の〳〵孫ゑて曲考よ信
さる作者の自立力しやよや大れ知あ〳〵む
ゑ子士の面〳〵古人の下まうるを孤ぬまて
戸ゐ再とくるを行を注暖自知でとく
陵聖の人を拙よ我ハ沙さす〳〵文人さまゐし

独るをわ

れをめて孤をとく考ハ撥宜誘引孤哭
陶侯の巳義よ知ゐ考人を義〳〵考く

機開し菊正風発の路撥宜するよの
草体をもて茂林の陵を弱〳〵陶をく
天和の次菊よ知ゐ狂も撥写て芝中
の草孤曲考を〳〵ゐよ門人只如孤年如
唖かくてハ独庶ゐ〳〵むと宮よ向上の陵
を下て考栗よ和け孤よ多日よ誘引
〳〵ゐ文角嵐考狂風宮まく陵考〳〵
〳〵きハ遠よ孤所を文陵れと陶侯の情よ
ゐ〳〵普子の〳〵ゐむさるよ元禄の比よ
て矢門ハ狂世よ知ゐ〳〵〳〵茂林ハ教もゐく
きえ菊の他祇も平侯よ変〳〵世考ゐ
るゐも延宝の曲考よ似す今陵きるよされ
侯ちよ正風の開〳〵ゐ考を茂林の工も延宝
の操変も孟ての人孤力拙くて学ハさる嵐
よおの〳〵地よ移〳〵おゐむまぐ考栗の
比考ハやりるとくよおハ菊の撥ゐ柿西を

みを日よりくくえ初めあるをもて川さ
くあるを作者者し後のすや和歌をもて
いふ時にはと毛上の代を大和んのまほ
をかるを山岡宮の代時より答えと後京宮
乃代より孫ひあらゝ社者より開て三代集を
賞あるむを是移てい孫より化るの間のむゝ
市し文字を失し歌の出来る者より成まるを
みて毛いまてたあるすき人の多き所みゝむ
他世をを程表より家り押移るより次方
より又者の減ゝ正風一統の後事戦後て
乳力表くにあきより人多きあゝ
箱迎宮のとき間を指詰めて文祥を
ても方ふ僅五三すを見さむをを手結
まあ出ふあより三百余の門者とい等むさ
きゝ文化の人ゝい極まる者ふとにもいさと
いそく伝まも稱てむを今世の他世をら

あゝ云書社果ようう考めひの所宗乃久
万くや虎ふすみるも弘まりれと皆愛と
歌て一説をゝ人のゝあくさゝら人の後を
きくは他世も正宗ひをい毛庵人の孫云
みゝ人をまを見て為正風水れと作云来
不意命ひを文禄より移て金冥ゝうみゝく
かゝくゝ毛巣云を吐ゝう祖三翁の像を看板
まをて活計とする者は世舌の狡い忍さるや
是皆方時のまを乃を但ゝる世ゝの他系の
恐あゝむゝとまれかくまれは注をゝ拾て
義のゝをきるを去ゝう先派を由て後者の法
ゝゝまさむゝやむと僅十句は翁を加ゝさう
法ゝく祖翁の根会を考ゝるは一旦世の等
りは但て地をもて徒引ゝ人を拾て孫呵
して安翁を陶法をもむゝゝみゝりむを惜ん
ゝゝ中乃ゝて後のひゝあは本弥ゝゝ等

ゝむ支志を吸ひ多や木因支考淨芝乃
三子俤よ行芦の伴をわ〻る中ハ余ゑ
麦林山隣舎不お文次よおて光園と乾
き志おたきゑと自己のお母のこゝて
止めるゝ人よ作ゝる法を新さる所之宜
みるゝ不祖義歩精の門人たよ月丈庶乃
人もいと稀あれも他所よ芦丈一伴い難
中之難垂過光難ともいて所ゝむさり
ゐ〻今ちく不そゝ糸にを紛てゑよ後
ちい弓て毛ちきき糸のゝり分ゝきゝゑ
とゝくるそて所人をきゝ光考ぢのを
たききのむゝを今よゝり西ゝ又てよ
ゝと返きゝ毛弟よるゑよ芦

勇迎え身戊申の季去

波め心録 大尾

復古蕉門 曲齋先生著述目録

貞享式海印録 全六冊
蕉門俳式の書世ゝ多〻と雖も頻古式を混しられい祖師の正式を正し俳句を挙て法式を論ずる也

海印録續編 追刻
先書ゝ多れ〻法式極り
をもつりも

掌中海印録 折本
先出の中より拾合去発及月雪の説ひ人倫五義の要拾ゝのゑ
を抜萃ゝ板る序ゝ便利乃出

七部婆心録 全六冊
七部集の注ゝゑ〻せく俳句ゝ拾ゝの
注ある事ゝ弁解ゝ上百年来
俳机をゝ出ちゐる支ゝ浮論ゝ也ゑ

附句見立號 追刻
見立類句作のこ注ゝ付さて
七部集ゝ弁〻載る所俳句ゝ
集めゝる事宝の出あり

年浪撰州
季寄の注書世ゝ多〻ゝ上ゝ
古学の道中絶〻ゝ俳諧ゝ
俳句せ〻拙のゝ〻ゝ点法ゝ来
不明るゝ物影〻きゝ悪ゝ〻ゝ
ゝ重図ゝ加ゝきゝ変ゝしも

同 後編 追刻
先年法門ゝ上ゝ神社寺ゝ
ゝの支古出の俳のゝ〻て其ゝ毛ゝ
ゝ出て孔ゝ寸ゝ不明ゝ所ゝ
ゝ也ゝ〻ゝ〻ゝ所ゝ所ゝ

世事の変ずるに世人旧弊と称し
性有便利の為ものなり

延宝より正徳まで
正風類題集 初編 五冊
享保より寛延まで
同 二編

世に類題の書多しといへども平句
已下の物を混じて発句の正きを
失ふことを歎き撰集したる且
事なれば侍ることなれば初学
の徒もとくべし
同 三編 四編 續く出す 宝暦こなたの句とまも
吳国名所考 先に行はれし名所考こなたの句
変化の用をもとしくるもの
俳諧 宇佐法師 五老井先生遺 武蔵 **再刻**
孫集編 先に行はれし孫集の神と猶ひそかに
東花集 合巻 表八句歩句銀杏を
西花集 再刻 物ふ老人自侍とくるを
らもるもの

獅子百韻七部集 彩示句。表法紙。三遍猛。投山伏
百光化。化。東山堂。八句巻
改正俳諧神珍抄 古き写誤仮名遣あり〜を
先生の紅西を又〜猶坪を
笈日記 集日記 再刻

諸國書林

京都

寺町五條上 山城屋佐兵衛
仝 姉小路上 橘屋久兵衛
六角柳馬場西 平野屋茂平
二条堺町東 林芳兵衛
三条柳馬場角 堺屋仁兵衛
仝 高倉東 出雲寺文次郎
日本橋一丁目 須原屋茂兵衛
仝 二丁目 山城屋佐兵衛
芝神明前 岡田屋嘉七
下谷御成道 英文藏

奥州

仙臺 伊勢屋半右衛門
會津若松 齋藤屋八四郎

出羽

米沢 辰巳屋長左衛門
金沢 八尾屋喜兵衛

加賀

仝 近岡屋太兵衛

越後

水原 小田島儀兵衛

越前　福井　鯖江
佐渡　羽茂郡
信濃　善光寺
美濃　加納
近江　彦根
泉州　堺
尾張　本町七丁目
　　仝　十二丁目
伊勢　松坂
　　津
　　仝
紀州　和歌山
　　仝
土佐　高知
阿波　徳嶋
讃岐　丸亀

帶　屋喜八
油　屋嘉右衛門
山本屋与八郎
蔦　屋伴五郎
三星屋宇　助
本　屋九兵衛
具足屋重兵衛
永樂屋東四郎
菱　屋藤兵衛
本　屋嘉　助
山形屋傳右衛門
篠　田伊十郎
坂本屋大次郎
帶　屋伊兵衛
政田屋民　藏
天満屋武兵衛
小川屋万五郎

播州　姫路
備中　倉敷
備後　福山
雲州　松江
因州　鳥取
藝州　廣嶋
長門　萩
　　下関
豊前　小倉
肥後　熊本
肥前　佐賀
　　（鍋嶋安芸寺町北
　　仝　博労町北
　　仝南久宝寺町北
　　仝北久宝寺町南
　　仝　町
　　仝本町北

灰　屋輔　二
太田屋六　藏
笹　屋喜兵衛
尾崎屋喜三右衛門
油　屋仲　藏
世並屋伊兵衛
山城屋彦　八
野上屋権左衛門
中津屋卯　助
小嶋屋義八郎
紙　屋惣右衛門
秋田屋太右衛門
河内屋茂兵衛
伊丹屋善兵衛
河内屋源　七
敦賀屋彦　七
鹽　屋弥　七